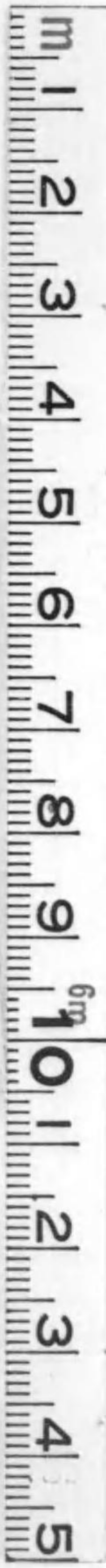


325
515



始



86.12.26

21130

325-5/5



歌
物
語

大正
6. 7. 7
内交



讚美歌物語序

【文 序】

内にある宗教生命の外に露出するもの、或は雄大なる倫理及神學思想となるあり、或は秩序整然たる世界的の大なる教會制度となるあり、或は獻身義俠的なる慈善救済の大事業となる事あり。而して其宗教生命表現の優美にして音樂的なるもの、一は讚美頌詠の歌とす。舊約書中に見る所の詩篇の如きは則當時の讚美歌なるか、吾人は之によりて當時の宗教生命の如何に潤澤豊富なりし乎を知る事を得るなり。我國の教會は設立日尙ほ淺く、其宗教生命未だ充分なる發達を爲さず、至て幼稚なるを免れず、故に其宗教生命の外に向て表現せる者にして未だ見るべきものあらざるは當然の事なり。然れども其生命表現の一なる讚美歌は、教會創立後間もなく編纂發行せられ、爾來今日に至るまで各派各教會の内にて公にせられたるもの少くも七八種あるを見る。而して現今我國に

於て最も弘く行はるゝ、『さんびか』は明治卅六年十月に第一版を出したるものにて我國主なる教派協同委員の編纂に成れるものなり。之に掲載する歌の多數は歐米諸國に久しく行はれたるものを譯述したるものにて、邦人の自作に成るもの少きは遺憾の事と爲さざるを得ず。是れ全く我國の宗教生命の尙ほ幼稚にして其内容の貧弱なるが故と爲さざるを得ず。然りと雖も此『さんびか』の發行部數已に數十萬に達し宗教書類にては原書に次ぎて最も多く行はるゝ者なるは吾人宗教生命の旺盛を示すものにて、大に吾人の意を強うするに足るなり。以上掲げたるが如く『さんびか』の多數は海外に於る歴史的の名作を譯出したるものなるが、其作者及作歌の境遇には種々興味多き閱歴、逸話の随伴せざるはなし。吾人にして作者の人物信仰如何、又如何なる場合に其歌の作られたるかを知るを得ば、之を唱ふるに當り興味を増す何程なるやを知る可らず。『讚美歌物語』の著者故テ、エム、マクネヤ君は『さんびか』の編纂に於て功

勞最も多き人なり。君『さんびか』の編纂中其作者並に作歌の事情及之に關聯する物語を集めて巻を重ねるに至る。而して遂に之が發行を見ずして空しく長逝せられたるは誠に遺憾の至とせざるを得ず。然るに同じく委員の一人にして邦文に堪能なる別所梅之助君が其遺稿を整理し、其文章を添削校正し之が出版の勞を取られたれば、此書の價値あるは余の縷々を待たずして明かなり。余や讚美歌編纂委員の末席を瀆したるのみにて、何等の功績なきものなれども、此書の刊行を見るに當り今昔の感に堪へざるものあり。歡びて此書を江湖同好の士に推薦す。

大正五年十二月基督降誕祭前

讚美歌編纂委員長

小崎 弘道 識

マクネヤ先生

なくなられたセオドア・モンロー・マクネヤ先生の家は、代々、長老教會と濃かな關係がありました。父祖或は同教會の教職となり、或は長老として、務められました。お母さんは婦人傳道會社の創立前から、外國傳道の事に心をこめてをられました。

斯うした遺傳と境遇のもとに、人となつたマクネヤ先生は、一八七九年にプリンストンを卒業なさいました。同級生の中には、合衆國の大統領ウイードロ・ウイルソン氏をはじめとして、教會と國家とに、高い位置を占められる方がありました。

先生は在學中、特別な賞與を受けもしましたし、また一八七七、八、九年の三年間、エール及びハーバードとの對校試合にも勝ちました。その頃の大學生

間に、先生は、フットボールの選手として、第一人者でありました。而もたゞ強いといふのでなく、正しい勇氣のある人として聞えてゐました。

一八八二年神學校卒業の後、觀光の客として日本を訪はれ、一八八四年宣教師として日本に來られました。いろ／＼つらい事もありましたが、たゞ義務の道を進まれました。廿五年以上にわたる傳道事業、東京とその附近のほか、千葉、長野、新潟の諸地におよびました。それは申すまでもなく、今日の旅より遙に難儀な長旅でした。

またそのころ八年間、明治學院の教授として經濟、歴史、人類學などを擔當せられたり、圖書室を整理せられたり、かつ同院の發展に力を添へられました。

先生はまたフェデレーテッド、ミッションスの發起者の一人で、八年間、その書記をせられました。日曜學校協會の創立にも、發達にも力を盡し、平和協

會などにも助勢し、アジャ協會の通信書記もなさいました。

文筆の上では、ゴア、ビード、デニス、マクリーンなどの作を翻譯し、更に『創世記詳解』といふ大冊をも著されました。この讚美歌物語は、晩年の書で、最後の章は、召を蒙つた二日ほど前に書かれたものであります。

もつともマクネヤ先生のなされた最大の事業は、『さんびか』第一、第二、兩編に残つてゐます。編輯、出版、經營、種々雑多な面倒を先生は、いとほれませんでした。セレクテッド、ヒムスといふのも編まれました。作歌者、作曲者の索引もつくられました。

故人は勤勉でした。日本に來られてから、三十二年の間、二回歸國せられた時のほか、休暇といふほどのものが實際なかつたさうです。

健康やゝに衰へゆきても、日々の勤をたのしみ、父なる神の御旨によりて、更に高き生命にうつりゆくべき心がまへのなりても、なほ地の上にてなすべき

新なるわざを企て、居られました。病いよく重りて、クリスチアンとしての剛毅あり、節制ありしは、枕邊なるフレデリック・マイアズの詩巻『パウロ』の左の一聯におつけなすつた鉛筆のあとにも、それとしのばれませう。

されど主は尙われを獄より放たず、
暫しはうちすておきしも永くは然せず、
葬られたるもの、はた復活れる人として、
人皆と共に憐み、丈夫のごま強かるべきを命じぬ。

(齋藤勇氏の譯による)

み誓たがはず、時來りて、一九一五年十一月廿一日、先生は東京芝二本榎の自邸にて、静な眠に入られました。神、之をとり給ひたるのです。

マクネヤ先生逝いて一週年の後、ミセス、マクネヤの記述に基きて

別所梅之助

はしがき

數年前讚美歌委員會で、歌の作者、譜の作者の事を記したものを取調べて出版しようといふ相談を致しました。『さんびか』第一、第二、合本につけた作者、作曲者の索引は、その第一の果で、これはその第二の果です。一はなるべく洩さず、短く記し、これは主なる人々をや、詳しく記しました。兩者は離れぬものであります。

この書は、すらくと書いてあるやうなものでありません。しかし骨のをれてゐる書です。讚美歌の物語も、平たいものを一二冊讀んでをるうちは、至極面白いものですが、少し詮索し出しますと、甲の記述は乙に破られてをるといふやうな始末です。そして心をそゝる話が消えてゆきがちです。

作者マクネヤ氏は、數十冊の類書をあさつて、その是非を辨別せられたのみ

ならず、問合せの手紙を諸方に發して、この書を編輯せられました。

書き方の繰返し、くりかへし、てあるのは、邦人には斯る事に親しまぬ方もあらんかとの心づかひかど存じます。この書がマクネヤ氏の遺稿となりまして今日、私は強ひてさういふ所を改めたくありません。

實は、私自身も、これまで讚美歌の話を多少書きました。然しマクネヤ氏の材料の方が遙に豊富でもあり、精確に近い事と存じますので、自分の起草したものをさしおいて、校訂その他に多少お手傳を致しました。各種の索引も私がこしらへました。尤も主な所だけよりあげてありません。

翻譯は、青山學院出身の儘田卓一君、名古屋の工業學校の教師田中儀三郎君、同志社専門學校の教授原口愛子女史、その他の方の御苦勞を願つたものです。護教の記者小鳥律三君は、校正その他煩雜な事に當つて下さいました。

文中の固有名詞は、主な所とか、はじめての所とかには、大抵歐文を入れ、

その他は便宜に従ひました。読み方は慣用に従つたつもりですが、一様になつてをりますまい。譯筆が異なつたからでもあります。譜の名、書物の名などは、譯名を附けたのと、附けないのとがあります。それは、ふさはしい詞が得られなかつたものもありませうけれど、作者は譯文を見て、ある部は消されませんでしたので、そのまゝにして置きます。文中の『古今』は『古今聖歌集』の略

『選歌集』とは“Selected Hymns”の事です。

附録として添へました私の『日本の讚美歌について』は、作者の求めによつて書いたもので、據るべき精確な記録もありませんから、見すばらしくもありませんし、また故老の目には、をかしくも映りませう。然し無精者の私には、今のところ、これ以上の事は書けません。ここに力を入れなければならぬ所の不十分なのは、お恥しい次第です。も一つの『讚美歌小史』は明治四十一年に書いて他に公けにしたものです。よほど、ためらひましたが、便宜上のせる事に

【語物歌美談】

なりました。文體その他、前の文と離れてをるのをお容し下さい。
なほ、しんみりと、この類の書をお調べなさる方に對して、おすゝめ申して
後めたくないのは、

一 Julian's Dictionary of Hymnology の第二版

二 Hymns, Ancient and Modern の Historical Edition を

一は千七百ページ、二は千ページ以上の大冊、一は調法、二は上品です。

筆をおくに當つて、教養ある紳士たりし故人をしのび、ひとり残れるその夫
人の上に、祝福のあらん事を祈ります。

〔4〕

大正五年九月

別所梅之助

目次

故テイ・エム・マクネヤ氏小照

序

故マクネヤ先生

はしがき

本篇目次、五十音索引

小崎弘道
別所梅之助
同上

〔1〕

【次目】

第一	たてよいざたて
第二	目くれてよもはくらく エスよ十字架を
第三	まごころもて

作者	頁數
Duffield	一
Lyte	七
Palmer	一四

【語物歌美讃】

第 四
第 五

キリスト世にかち

みめぐみあるひかりよ

くるあさごとに

わがたまのひかり

いもとせのみちを

かみはわがやぐら

みよや十字の

ゆふ日おちて

主よみもとに

うきよのさかえは

たえぬひかり

きみなるエスよ

Newman

二三

Keble

三四

Luther

四七

Baring-Gould

五五

Adams

六三

Steele

七〇

Havergal

第 八
第 九、十

第 十 一

かみのたまふ

かへりきたる

わがきみエスよ われを

きたのはてなる

聖なる聖なる

くしき星よ

かすみのたなびく

あくまのくにを

さかえのきみの

たみみなよろこべ

日のてるかぎりは

みたまよくだりて あいの

Heber

八四

Watts

九三

【 次 目 】

第 十 二

【 次

【語物歌美識】

第十三
第十四

かみはわがちから
むかしよりよしの
きよきみたまらの
ちとせのいはよ
わがたましひを
夜をもるつきに
エスのみさかえと
かみにはさかえ
みよくものにのりて
あめなるよろこび
よろこばしき
われはかたく

Topladay 106
Wesley 113

【次目】

第十七、十八

第十六

第十五

あめつちにあまる
つみのふちに
しろがねのひもの
エスよこのみを
あなうれしわがみも
いさをなきわれを
はなのあけぼのも
うつりゆくよにも
かみはかせにのり
みかみのひかりよ
いづこにみたまの
さかえにみちたる

Van Alstyne 112

Elliott 114

Cowper 116

Newton

第十九、二十

エスキみのみなは
ともといふともは
あまつみつかひよ
うつせみのよ

Perronet 一六二
Malan

第二十一

ちなるみかみよ ともに
つかれたるものよ われに
つみのおもにを

Guyon
Bonar 一七四

第二十二

なほしばしの
主よみてもて
ちのさだめし
いのりはくちより

Montgomery 一八五

第二十三

あななつかし

Dwight 一九五

第二十六

はるよおきよと
もろびとごぞりて
めさめよわがたま こゝろ
すくひのひかりの
みすやかやける
かぞへもえがたき
いのちのみことば
主よ日に〜

Bliss 二二四

第二十七、廿八

いともふかき主のあい
かみのめぐみの
みことばによりて
つかれたるものよ とく

Faber 二三四

Neale

第二十九

ともたりあだたる
ホザナよホザナ
みいづあめつちに
みやこのそとなる
ダビデのむらの
はなはほゝるみ
われらはちひさく
ひかげうららに
あしきわざを
よのなみさわげご
あめよりくだり
わがさゝぐる

Alexander 二九三

第三十

とぎせるかぎを
信もて世とたゝかひて
みとのにけふも
かよわきあしの
めさめよ わがたま あさひに
この日のめぐみを
日かげしづかに
かみよみめぐみを おもひ
はてしもしられぬ
かみよみやをさるごとて
けふはひかりを
みかみのたまひにし

How 二九四

第三十一

とぎせるかぎを
信もて世とたゝかひて
みとのにけふも
かよわきあしの
めさめよ わがたま あさひに
この日のめぐみを
日かげしづかに
かみよみめぐみを おもひ
はてしもしられぬ
かみよみやをさるごとて
けふはひかりを
みかみのたまひにし

Ken 二九四

第三十二

とぎせるかぎを
信もて世とたゝかひて
みとのにけふも
かよわきあしの
めさめよ わがたま あさひに
この日のめぐみを
日かげしづかに
かみよみめぐみを おもひ
はてしもしられぬ
かみよみやをさるごとて
けふはひかりを
みかみのたまひにし

Doane 二九〇

第三十三

とぎせるかぎを
信もて世とたゝかひて
みとのにけふも
かよわきあしの
めさめよ わがたま あさひに
この日のめぐみを
日かげしづかに
かみよみめぐみを おもひ
はてしもしられぬ
かみよみやをさるごとて
けふはひかりを
みかみのたまひにし

Addison 二九〇

Ellerton 二九五

第三十四

みなをたへつゝ
われらは日にく

Bickersteth 三〇四

第三十五

やすしやつみのよにも
たふとき主のたいより

Bowring 三一一

うつりゆくよにも かはらで
めぐみのひかりは わが

よをもるともよ

第三十六

あへッレヘムよ

Brooks 三一十

第三十七

みつかひのうたは

Gerhardt 三二四

きよきよろこびの

主よ主のあいをば

主はわがとも

第三十八

いざやともに

Rinkart 三三三

第三十九

主のたふときみことばは

Keene 三二一

第四十

わづらはしきよを

Brown 三四九

つきのかげは

第四十一

いともたふとき

Stone 三五六

つみをにくみつゝ

第四十二

あなうるはしシオンのあさけ

Hastings 三六五

たふときわが主よ かける

第四十三

あしたのひかり

Smith 三三三

主いままねく

第四十四

このよにうまれ

Milman 三八一

第四十五

あまつみかてに

White 三八九

第四六、四七

みそらにきぢめく

みかみはちからの

ひかりにあゆめよ

かみのみことばよ

よろづのものは

みそらのかなたに うみの

ほしをしるべに

かはゆきこども

あめつちのみかみをば

われらはちりの

主^{しゆ}エスのふたゝび

ひどのすがたの

Barton

三九八

Whittier

Dix

四一〇

Grant

四一七

Rowson

第四九、五

第四八

第五一、五二

第五三、五十四

みそらのかなたに ともころ

こひつじをば

なつかしくも

あらなみさかまく

ものはかはり

やみにこのよの

すいしきころを

むくいをのぞまで

ゆふひのなごりは

ちゝのみかみよ わが

あゝほむべきかな

かみよわれはいま

やみよのとばり

Midlane

Gary

四三二

Gates

Lathbury

四四一

Hanaford

Procter

Codner

Cousin

第五十五

けふをもおくりぬ
 主しゆわれをあいす
 うみかはのやま
 めぐみふかき
 いともかしこし
 つとめいそしめ
 わが主しゆエスよ ひたすら
 こよなきめぐみの
 おもへばむかし
 ゆきしもしげき
 すゝめすゝめ
 よろこびうたへ
 あいのみかみよ

Warner 四五八

Hawks

Hankey

Coghil

Prentiss

Harris

Lanke

Alford

Monsell

四三二

第五十六

ちからのかぎりに
 われらたがへし
 主しゆはわがかひぬし
 エスよこの日ひ

Claudius

Baker

Kelly

四八九

第五十七、五十八

きみのきみにます
 よはみなあくまを
 わがみかみよ
 ゆふべのいのり
 たふときわがとも
 しづけきのりのり
 つかれしこゝろを
 めぐみのいづみよ
 かみによりて

Burns

Scriven

Walford

Matheson

Robinson

Fawcett

五〇二

第五十九、六

主しゆのしめしにより
かみよみめぐみを われらに
すくひぬしエスよ
エスよこゝろに
ゆきてはかへらぬ
はるかにあふぎみる
いつくしみふかき
かみともにいまして

Edmeston
Nicholson
Nelson
Bennett
Gilmore
Rankin

附 録

日本の讃美歌について

讃美歌小史

別 所 梅 之 助
同 上

英文索引

五十音索引

(数字は本書の頁数を示し、括弧内の数字は、特にその歌を主題として叙述せる篇を示す)

【引 索 音 十 五】

あゝべツレへムよ	三二七(第三十六)	あまつみくには	三六四
あゝほむべきかな	四四一(第五十三、四)	あまつみつかひよ	一六二(第十九、二十)
あいのみかみよ	三六四、四七二(第五十六)	あめつちをしらす	二二二、四二四
あくまのくにを	九〇	あめつちにあまる	一一〇
あしきわざを	二五三(第二十九)	あめつちのしゆよ	一九一
あしたのひかり	六、三七三(第四十三)	あめつちのみかみをば	四一七(第四十九、五十)
あなうるはしシオンのあさ	三六五(第四十二)	あめなるよろこび	一一〇
あなうれしわがみも	一三四、一三五	あめにもつちにも	二七五
あななつかし	一九五(第二十三)	あめよりくだり	二六四(第三十)
あまつみかてに	三八九(第四十五)	あらかなみさかまく	四三一(第五十一、二)

【語物歌美讃】

いかできよめん	四六〇	うきよのなげきも	四六一
いけるしゆのみたま	一九二	うきよのさかえは	七〇(第九、十)
いざやどもに	三三五、三四二(第三十八)	うつせみのよ	一六二(第十九、二十)
いさをなきわれを	一三七、四三〇、四六八(第十六)	うつりゆくよにも	かはらで 三二一(第三十五)
いつくしみふかき	五〇三(第五十九、六十)	うつりゆくよにも	みてに 一四二
いづこにみたみの	一四七、一五五	うみかはのやま	四五八(第五十五)
いともかしこし	四五八(第五十五)	うみゆくども	一九一
いともたふどき	三五六(第四十一)		
いともふかき主 <small>しゆ</small> のあい	二二五(第二十六)	エスキみエスキみ	一三四
いのちのみことば	二二五(第二十六)	エスキみのみなは	一四七、一五六
いのりはくちより	一八五(第二十二)	エスのみさかえと	一一八
いもどせのみちを	四三	エスよこゝろにやどりて	五〇三(第五十九、六十)

【引索音十五】

エスよこのひ	二五一、四七三(第五十六)	かみにたより	二二〇
エスよこのみを	一三四	かみにはさかえ	九七、一一九、一二五、二八二
エスよじふじかを	七(第二)	かみによりて	五〇二(第五十九、六十)
おもへばむかしエスキみ	四五九、五一五(第五十五)	かみのかはらぬ	二七一
かすみのたなびく	九〇	かみのたまふ	七〇(第九、十)
かせふきすさみ	四〇三	かみのみことばよ	三九八(第四十六、七)
かぞへもえがたき	二一六(第二十五)	かみのめぐみの	二三四(第二十七、八)
かはゆきごども	四一〇(第四十八)	かみはかせにのり	一四六(第十七、八)
かへりきたる	七〇(第九、十)	かみはわがちから	九九
かみともにいまして	五〇三(第五十九、六十)	かみはわがやぐら	四七、九九(第六)
		かみよみめぐみを	おもひ 二九〇(第三十二)
		かみよみめぐみを	われらに 五〇二(第五十九、六十)

かみよみやをさるとて 二九五(第三十三)
 かみよわれはいま 四四二(第五十三、四)
 かよわきあしの 二七〇
 きたのはてなる 八四、二八九、三一六、三七八(第十一)
 きみなるエスよ 七〇(第九、十)
 きみのきみにます 四八九(第五十七、八)
 きよきみたみらの 一〇〇、一〇四
 きよきよろこびの 三三四(第三十七)
 キリストよにかち 一八
 くしきほしよやみのよに 九〇、九一、三六九

くるあさごころに 三四、四一五(第五)
 けふはひかりを 二九五(第三十三)
 けふをもおくりぬ 四五八(第五十五)
 このひのめぐみを 二七四(第三十一)
 このよにうまれ 三八一(第四十四)
 こひつじをば 四一八(第四十九、五十)
 こよなきめぐみの 四五九(第五十五)
 さかえにみちたる 一四六(第十七、八)
 さかえのきみの 九三、三八八(第十二)

しづけきのりの 四九〇(第五十七、八)
 しゆいままねく 三七三(第四十三)
 しゆエスを 二二〇
 しゆエスのふたゝび 四一七(第四十九、五十)
 しゆとともならん 一九一
 しゆはいのちを 八〇
 しゆはわがかひぬし 二五二、四七三(第五十六)
 しゆはわがとも 三二四(第三十七)
 しゆのしめしにより 五〇二(第五十九、六十)
 しゆのたふどき 三四一(第三十九)
 しゆよこゝろみ 一九一
 しゆよ主のあいをば 三三四(第三十七)

しゆよ主のみやに 一九〇
 しゆよひに〜 二二五(第二十六)
 しゆよみてもて 一七四(第二十一)
 しゆよみなによりて 一九一
 しゆよみもどに 五二、六三、四六七(第八)
 しゆわれをあいす 四五八(第五十五)
 しろがねのひもの 一三三
 しんもてよとたゝかひて 二六四(第三十)
 すくひぬしエスよ 五〇二(第五十九、六十)
 すくひのひかりの 二二六(第二十五)
 すいしきこゑを 四四二(第五十三、四)

【語物歌美詠】

すゝめく 四七二(第五十六)
 すべしらすみかみよ 二二〇
 せいなるく 八九九二
 そらさえわたれる 一三八
 たえぬひかり 七二七五
 たてよいざたて 一(一)
 めびのむらの 二五三(第二十九)
 たふときかなしゆ 一九二
 たふとき主しゅのだいより 三〇四(第三十四)

たふときわが主しゅかゝる 三六五(第四十二)
 たふときわがども 四八九(第五十七、八)
 たみみなよろこべ 九九、一〇四
 ちからのかぎり 四七二(第五十六)
 ちゝなるみかみよ ともに 一七二
 ちゝのさだめし 六、一八五(第二十二)
 ちゝのみかみよ わが 四四一(第五十三、四)
 ちとせのいはよ 九七、一〇三、一〇六、二八二、
 三七〇、四一一(第十三)

つかれしこゝろを 三三二、四九〇(第五十七、八)

【引索音十五】

つかれしものは 一七九
 つかれたるものよ 二三四(第二十七、八)
 つかれたるものよ われに 一七四、三一六、四一四(第二十一)
 つきのかげは 三四九(第四十)
 つごめいそしめ 四五九(第五十五)
 つみのおもにを 一七四(第二十二)
 つみのひとやより 二八四
 つみのふちにおちいりて 一二八(第十五)
 つみをにくみつゝ 三五六(第四十一)

どくあげよ 二七一
 どぎせるかごを 二六四(第三十)

どもたりあだたる 二三四(第二十七、八)
 どもといふともは 一四七、二五九
 どもまたども 一九一
 なつかしくも 四三一(第五十二、三)
 なほしばしの 一七四(第二十二)
 なやみやまひの 一〇七
 なやむものよわび人びとよ 三七一
 はてもしられぬ 一五八、二九〇(第三十二)
 はなのあげほのも 一四一
 はなはほゝるみ 二五三(第二十九)

【語物歌美讃】

はるかにあふぎみる 五〇三(第五十九、六十)
 はるよおきよと 二〇二
 ほかげうらゝに 二五三(第二十九)
 ひかげしづかに 二七四(第三十一)
 ひかりにあゆめよ 三九八(第四十六、七)
 ひくれてよもはくらく 七三七、二九六、三二二(第二)
 ひとたびは 四六二
 ひとのすがたの 四二七(第四十九、五十)
 ひのてるかぎりは 九九、一八九
 ベテルのみかみよ 二二〇
 ホザナよホザナ 二三四(第二十七、八)
 ほしをしるべに 四一〇(第四十八)
 まごころもて 一四(第三)
 またましらたま 二四五、三六三
 みいづあめつちに 二三四(第二十七、八)
 みかみのたまひにしこのひも 二九五(第三十三)
 みかみのひかりよ 一四七、一五九
 みかみはちからの 三八九(第四十五)
 みかむりも みどのをも 一三八
 みことばによりて 二三四(第二十七、八)

【引業音十五】

みずやかいやける 二二六(第二十五)
 みそらかけりゆく 一九〇
 みそらにきらめく 三八九(第四十五)
 みそらのかなたに うみの 三九八(第四十六、七)
 みそらのかなたに とも 四一七(第四十九、五十)
 みたまよくだりて あいの 九九
 みたみの王なる 三四四
 みつかひのうたは 三三四(第三十七)
 みつかひのたへうたは 二三七
 みどのにけふも 二七〇
 みなをたへへつゝ 二九五(第三十三)
 みめぐみあふるゝ 一五五
 みめぐみあるひかりよ 二二三、三三五、六四、三二一(第四)
 みやこのそとなる 二五三、三五九(第二十九)
 みよイスラエルの 二二〇
 みよくものりて 一一九、二八二
 みよやじふじの 五五、三九五、四七八(第七)
 みよやわが主の 一二五
 むかしよりよゝの 一〇〇、一〇四
 むくいをのぞまで 四四一(第五十三、四)
 めぐみのいづみよ 五〇二(第五十九、六十)
 めぐみのひかりは わが 三二一(第三十五)

【語物歌美説】

めぐみふかき	四五八(第五十五)	ゆきてはかへらぬ	五〇三(五十九六)
めさめよわがたま	あさひ 九七、二七四(第三十一)	ゆふひおちて	六二
めさめよわがたま	こゝろ 二〇四(第二十四)	ゆふひのなごりは	四四一(第五十三、四)
ものはかはりよはうつれど	四三二(第五十二、二)	ゆふべのいのり	四八九(第五十七、八)
もろびどこぞりて	二〇四(第二十四)	よのなみさわげど	二五四(第二十九)
やすしやつみのよにも	三〇四(第三十四)	よはみなあくまご	四八九(第五十七、八)
やみにこのよの	四四一(第五十三、四)	よろこばしき	一一〇
やみよのどばり	四四二(第五十三、四)	よろこびうたへ	四七二(第五十六)
ゆきしもしげき	四七二(第五十六)	よろづのものは	三九八(第四十六、七)
		よをもるつきに	一一八
		よをもるともよ	三二一(第三十五)

【引索音十五】

わがきみエスよ	われを	七〇(第九、十)
わがさゝぐる		二六八
わが主 ^{しほ} エスよ	ひたすら	四五九(第五十五)
わがたましひを		一一一、一一三(第十四)
わがたまのひかり		三四(第五)
わがみかみよ		四八九(第五十七、八)
わづらはしきよを		三四九(第四十)
われはかたく		一一〇
われはたがへし		四七三(第五十六)
われはちひさく		二五三(第二十九)
われらはちりの		四一七(第四十九、五十)
われらはひに〜		二九五(第三十三)

讚美歌物語



主のつはもの『Stand up, stand up for Jesus』

(おんびり第一編二七五・古今三四一・選歌集二八三)

讚美歌の中でも、戦の精神を酌めるものは、古来よく愛唱せられ、又有用なものとなつてゐる。それはクリスチャンの生活其の者が、一つの戦争であつて、真剣に且痛切なる點に於て、他の戦争と何等異なるどころがないからである。

されど又こゝに、格別に戰鬪的の讚美歌を要する場合がある。即ち信徒の熱切なる活動を要するの時、わけても此の運動が、主の御前に廣く萬民の結合をみるが如き場合に於て、殊にさうである。

丁度此の種の戦が、一八五七年の冬より翌年の春にかけて、アメリカの一部

【一 第】

【一

市 Philadelphia に起つた。而して此の『たてよいざたて』の歌は、其の不朽の結果の一つといふべきものである。

其の後久しからずして、南北戦争が起つた。そして自ら此の歌が、戦場にある兵士等の愛唱するところとなつた。

此の歌を書いたのは、長老派の牧師 Rev. George Duffield (息) (一八一八—一八八八) であるが、歌の成つた次第については、監督派の一青年の影響をうけたのであつた。此の青年といふのは、今し言ひ及んだ信仰復興運動の中心人物で、Rev. Dudley Atkins Tyng といふ人物であつた。此の名は、其の一子 Rev. E. S. Tyng 氏の日本傳道によつて、我國によく知られてゐる。子息 Tyng は、多年米國監督派傳道局の一員として、嘗ては大阪や東京に居住してゐた。序でながら『さんびか』二十二番及び百十六番(古今三・一〇五)の二曲は、其の手になつたのである。ヒラデルヒヤの信仰復興が、其の極點に達した時、端なくも不慮の出来事が

Tyng (父) の上に振りかゝつた。そして彼は一命を落すに至つた。或日のこと其の衣が、折柄納屋に廻轉中の一機械に觸れた。片腕は身體より挽れんばかりとなつた。かくて其の傷の爲に、彼は再び起たなかつた。其の臨終に際してかの信仰復興運動に與かつた同志の者に、何か傳ふべきことはないかと、尋ねられた時、『我等凡て主の爲に起て』とだけ言つて下さいと、彼は答へた。而して此の一句は、彼の生涯の目的を適切に言表はしたる言葉として、又其の人格の表象として、葬儀の際に引用せられた。其の後數日を経て、長老派の友で又共に福音のために働いた、George Duffield (息) が、聖日の朝に、『汝ら立つに、誠を帯として腰に結び、義を胸護として胸に當て』(エペソ書六〇一四) の聖句をとりて説教し、此の讚美歌を以て、其の説教を結んだ。歌は説教の草案中に、ものさされたのであつたが、其の後間もなく世に表はれ、又遂に廣く世界に知らるゝに至つた。かくて、各派の歌集に收められ、又殆んど各國の言語に傳へられて、幾

千の信徒は、其の心の中に獎勵を得、且靈感を受けた。此の歌の中には信徒の受くべき報賞や、喜悅や、希望が、いかにも立派に歌はれてある。なほ此の喜ばしき音信が、行く末永く世に傳へられるのは、疑ひもない事である。

George Duffield (息)は、長老派系の第三代の牧師で、三人とも代々其の氏名を同じくした。第二代に當る其の父は、有力なる神學者且説教家で、尙讚美歌をも作つた。又其の初代、祖父たる人は、獨立戦争に際して、軍隊附牧師を勤めた。而して此の一家の名聲は、其の息にて、第四代に當る Rev. Samuel W. Duffield によりて、更に高められた。その聖歌學上に於ける貢獻は、普く世の知るところである。

此の一篇の主人公たる George Duffield は、エール大學及びユニオン神學校に學び、後長老派の牧師として、種々重要な位置を占むる事、實に四十年以上に及んだ。教職の上でも、優秀なる力量を示したが、其の讚美歌に至りては、

眞にこれ彼の生涯の花であり、又主の事業に於る冠冕であつた。歌は曲譜の助を藉らないで、世人の愛好するところとなり、始めに用ゐた譜などは、其の後長く忘れられてゐたやうな有様であつた。現時一般に用ゐらるゝのは Webb の作譜で、其曲は『さんびか』にも『古今聖歌集』にも收めてある。此の Webb といふのは、作曲家 George James Webb (一八〇三—一八七) のことで、生れは英國だが、多く米國に住し、オルガニスト及び音楽教師として、斯界に名を擧げた。此の譜は一八三〇年、英國より米國へ渡る途中での作で、當初は讚美歌用にしよるなごいふ心組はなかつたのである。渡米後彼は、ボストンの音楽學校に入り Lowell Mason (第三篇参照) と相知るやうになつた。始めは其の生徒であつたが、後その協力者となり、二人は遂に宗教用ならぬ歌集を公にするに到つた。本篇の曲譜も、これによりて、始めて世に表はれ、後 Duffield の名作と結ばるゝに及んで、齊しく不朽の榮譽を擔ふに至つた。此の如き例は往々世にみ

るところである。而してかゝる結合を生じたものは、管に此の二つに止まらず尙他に二つある。一八三二年米國浸禮派牧師 Rev. Samuel Francis Smith, D. D. (第四十三篇参照) の物した傳道の歌『あしたのひかり やゝあははれ』“The morning light is breaking” (巻二の第一編一五二・古今二〇一・選歌集一五三) 及び Montgomery の『さゝのなだめし』“Hail to the Lord's anointed” (巻二の十二篇参照) の二つが、即ちそれである。凡て神の教會にとりて、生ける力となるものは、キリスト教徒の生活と心に、盡きざる生命となつてをるものに外ならぬ。

Webb は、管に作曲家たりしのみならず、多年ボストン市の Handel & Haydn 音楽協會の會長として、又聖樂 (Oratorio) 及びシムフォニー (Symphony) の指揮者として知られ、尙多くの音楽教師養成會にたづさはり、且廣く米國諸州に渡つて、一般音楽思想の普及に力を致したので、世に聞えてをる。

第二

『日くれて四方はへらへ』“Abide with me, fast falls the eventide”

(巻二の第一編九・古今七・選歌集九)

『エヌよ十字架を 御手よりうけて』“Jesus, I my cross have taken”

(巻二の第一編二六二・古今三〇三・選歌集二五八)

第一章にあげたやうな、我等を勵まして罪惡と戦はしめる讚美歌もあれば、又祈禱、瞑想のおちついた歌もある。此の『日暮れて四方は暗く』は、靜かな歌の一つで、長い間各國諸派の信徒に愛好せられてゐる。

此の歌の作者たる、英國々教會の教師 Rev. Henry Francis Lyte (一七九三—一八四七) は、イングランド及びアイルランドの諸地に、聖職を奉じたが、イングランドの西南端 Devonshire の下 Brixham といふ海邊の町には、わけて永く居住

してをつた。其の地の人々は、粗野で教育もなかつたから、詩人風で閑居が好
 きで、それに健康の勝れない彼にとつて、かうした職務は、殊の外堪へがたか
 つた。それでも彼は尙、二十五年といふ長い歲月の間、其の職をついで、土
 地の人々に慕はれ、晩年に及んでは、年々冬期を温暖なる南フランスに過さな
 くては、ならぬやうになつたけれども、人々の心は彼を離れなかつた。一八四七
 年の秋十一月此の世の生を終へたのも、同じフランスで、保養地及び遊山場と
 して名高い Nice に程近いところであつた。當時英國々教會の一教師であつた其
 の友人 Henry Edward Manning 即ち後の羅馬教會大僧正が、彼に最後の聖餐を
 授けたといふ。ライトは病弱の爲に、よく其の職に堪へえなかつたけれども、
 尙其の年の夏を家に過して後再び南フランスへ行くべき時となり、最後の日曜
 を迎へたところ、身體が非常に弱つて、無理をしようと一命にかゝはるといふ容
 態であつたのに、どうしても教壇に立たねばならぬとて、聞きいれなかつた。

而して其の九月四日の夕方、此の歌を作つた。歌は『どこしなへに死なざる』
 作で、彼の名は、これによつて、後の代までも朽ちせぬものとなつた。英國の
 王エドワード七世陛下は、此歌を愛吟せられたので、その御遺骸を墳墓にお移
 し申した時には、一同のものがこれを歌つた。

此の詩人説教家に對する Bricham の人々の愛着は、變らなかつたとはいへぬ。
 彼の死の前年には脱會騒ぎが起つた。即ち Plymouth Brethren の感化により多
 數の會衆は彼が許を離れ、又其の唱歌隊の如き、殆んど大部分脱會するに到つ
 たのである。原歌にみゆる "When other helps fail" (寄るべなきみのたよる) の
 一句は、幾分か此の出來事の爲に、心を破られし結果と思はれてゐる。さばれ
 之を歌ふ度毎に人々の心に湧きいづる喜びと慰藉の思ひこそは、作者が其の
 終焉に際して、信仰あつき希望より、『死ぬれども信仰によりて今なほ物言ふ』
 (ヘブル書十一〇四) 人と、己をもならせ給へと祈つた祈禱の應答に外ならない。此

の祈禱は詩の形をとつて、今も尙我等の中に存してゐる。

御手をもて、死にし者をも、生命に導き給ふ主よ、

願はくは、あまつ恵みに、みちたらせ給へ。

いまはのときにも、*白鳥のごとく、

とこしなへに死なざる歌を歌はしめたまへ。

*（白鳥の死なんとするや極めて、美はしき聲もて鳴くといふ、傳説に基く）

彼の生前、記しつ、歌ひつしたものは、世の人の心の中に生きて、力となり、助けとなつた。死すとも全くは黙さぬ其の生は、要なく價値なき者に終らなかつた。彼は其の身將に冷き墓所に横へられんとして、かく思ひつゝ死も尙快よきものと感じたであらう。よし身は死すとも此の歌の中にあるやうに靈魂の記念や、カルバリ山上、キリストいまし給ふとの貴き證を、後に残すとしたならば、永い病にくるしめられた、其の人の一生が無駄になつたとは言はれまい。

かくキリストいますといふ事こそ、我らが此の世にある間、いつも喜悅の泉となり、來らん世を望みつゝ進みゆくをりに、つきぬ希望を興ふるものである。

Lytle は英國陸軍士官の子息でスコットランドに生れ、アイルランドの Dublin で教をうけた。數卷の詩集を公けにしたが、英米の讚美歌集に此の中からとつたものが頗る多い。其の中『日くれて四方はくらく』に次いで著名なのが、『エヌよ十字架を 御手よりうけて』(Jesus, I my cross have taken) (おんびの第一編二六

二・古今三〇三・選歌集二五八) である。これは一八二四年始めて公然と職についた時に、書いたもので、年若き一婦人の經驗に感じて作つたといふことである。此の婦人の家庭は悪いものではなかつたが、派手で世俗的なるところから、彼女は其處を離れるやうになつた。それはキリストに歸依した結果、身も魂も献げて、熱心なる奉仕の生涯に入らうと、堅い決心を云ひ表はすに至つたからであるといふ。

『日くれて四方は暗く』の譜は、Eventide と稱し、聖公會用讚美歌 “Hymns Ancient & Modern” (古今聖歌集) の樂曲編纂者たる William Henry Monk (一八三八—八九九) といふ音樂博士の手に成つたものである。ライトの歌が此の歌集に收められたのは、其の流麗な文字と深い靈感とによるので、以前から教會で用ゐられてゐた爲ではなかつた。作者の附した、彼の自作の譜といふのは、餘りよくないもので、全く葬られてをつた。されど Eventide の編まるゝに及んで、其の缺陷は補はれた。此の曲は歌の場合と等しく、或刹那、天來のインスピレーションにふれて、僅か十分の短かい時間に、作られたのであつた。かくて今は歌も曲も、基督教國の禮拜、儀式等に於て、永遠に結びつけられてをる。而して誰一人、二者を離して考ふる者はない。(作曲家 Monk のノミについては、第二十七篇をみよ)

『エスよ十字架を 御手よりうけて』の曲譜 Eilestie は、世界有數の音樂大

家の一人なる Mozart の作中よりとつたもので、さんびか第一編一九三・及び第二編四七・八六・二四七は、皆これと出所を同じうしてゐる。

此の Johann Chrysostom Wolfgang Amadeus Mozart (一七五六一—九一) は、素養ある音樂家の一子として、ドイツの Salzburg に生れ、自身も音樂の學理と技術とに通じ、中にもヴァイオリン、オルガン、ピアノに秀でてゐた。彼は幼少の頃から、驚くべき將來あるを示し、且又演奏者として巧妙なるのみか、其の作曲上の天才も、實に驚くばかりで、歌劇、シムフォニー、教會音樂、室内音樂等、様々の樂式を編んだ。かくて彼は一生を通じて、廣く歐洲各國の宗教界及び政治界における高貴なる人々の眷顧をうけたが、世の事物に無頓着で、不用意なところから、比較的貧しき生活をついけ、負債に追はれ、遂に Vienna に死んで、貧人の墓地に葬られた。

第三

『まじゝろもて あふちをひらと』 “My faith looks up to Thee”

(さんびの第壹編二二三・古今三〇六・選歌集一八〇)

此の歌を書いたのは神學博士 Rev. Ray Palmer といつて、米國の讚美歌作者中、尤も優れし人として、世に廣く認められ、又十九世紀の中葉に當り、會衆派の牧師として令名のあつた人である。彼はユール大學を卒へて、神學の研究に従ふ前一年の間、學校の教師をしてをつたが、此の歌のなつたのは、恰度其の年(一八三〇年)のことであつた。彼のたづさはつてゐた學校は、紐育の下町にあつた。今や此の地には、Sky-scrapers (摩天樓)と稱する、巨大なる建築物が多く立ちならんで、様々の事業が盛んに行はれてゐるが、當時は、閑雅な人々の家々の占むるところであつた。

不思議に思はれるのは、初めてできた此の歌が、其の作中最も優秀なもので然も讚美歌作者としての盛名は、これがために擧つたといふ一事である。此の曲譜として用ゐらるゝ、Olivet の作者 Lowell Mason は、此の年若き作家に對して、曾てかういふことを言つた。

『あなたは、此の後生き永らへて、様々の善事をなさるでせう。されど、此の「まじゝろもて」の歌の作者として、殊に後世に傳へらるゝでせう』

此の豫言は後代のみか、作者六十年の生涯に對しても、言ひ得たものであつた。かくて此の讚美歌は、其の曲と共に、彼の生前既に信徒の間に廣く用ゐらるゝに至つた。嘗に英語の話さるゝ國々に止まらず、尙譯されて、他の諸國にも及んだ。又かの有名なる會衆派の牧師、R. S. Storrs 博士が、Palmer の結婚五十年の祝賀に際して、誠に適切なる次の一句を述べた。

『神が此の世の子等に與へ給ふ、特別なる御恩惠の中にも、尤も大なるもの

ながら、與へらるゝことの比較的少いものがある。即ち見事な讚美歌をよみいで、教會に用ゐられ、國を異にし、言語を異にせる敬虔な人々の口に上り、光り輝く後の世までも唱はるゝ如き、其の一つである』

有名なる歌には、或特殊の出來事に感じて作つたとか、又特別の場合に用ゐるが爲とかいふのが多いが、此の歌はそれと趣を異にして、外部の影響をうけたといふやうな跡が少しもみえない。作者は心の中に、人間の至らざること、痛切に感じたのであつた。かくても静かな部屋の中に、只一人思ひをこらしめてゐると、主キリストが、愛と恩寵とにみちて、彼の心に深い靈動を起させ給ふことが、明かに感ぜられた。彼の歌が其の心の中に閃いたのは、將に此の時であつた。此の歌を歌ふ人の心には、それが恰も己の實驗の如くに映するのである。そのため此の歌は、信徒の間に歡び迎へられ、又一篇の聖文學として、特に名あるものとなつたのである。

原歌の最後の一行に、『贖はれし靈魂』、"A ransomed soul" というものがある。贖罪の大業は、彼の心に、尤も意義深いものであつて、彼が之を手帳に記さんとするや、胸せまりて、遂には涙が瀧のやうに流れたと、自らいうてゐる。

Brooklyn の Theodore L. Cuyler 博士の書いた『回想録』"Recollections" にはかういふことが記されてゐる。即ち或聖餐の日曜日のこと、當時年既に老いて、近く『あまつぎしに』至らんとしてゐた Palmer 博士が、彼のために説教をなし、後聖晩餐式を助けてゐたが、パンと葡萄酒とが分たると、頃になると、ふるふるやうな聲で、此の聖歌を歌ひ出した。

まごゝろもて あふぎまつらん
のろひの 木にかゝりて しにたまひし

すくひのぬし わが主よ

Cuyler 博士の言へる如く『其の様は恰も天の唱歌隊の歌に耳を傾けてゐるやう

であつたので、全會衆は深く動かされた』

Ray Palmer は一八八七年、七十九歳を以て此の世を去つた。その諸所に牧師たること三十年以上に及び、しかのみならず尙十二年間、米國會衆派同盟の役員として勤めた。其の生涯はかく多忙を極めたので、自由に詩作に耽ることなごできなかつた。然し其の折々にものしたるものも、これを一卷に纏めるならば、優に入ッ折三百五十頁を充たすであらう。此の中讃美歌は譯歌を合せて四十ばかりを數へ、尤も主要なものとなつてゐる。

彼は尙聖文學數卷を出した。其の創作にかゝる聖歌の中で、尙『さんびか』に譯載されてゐるのは、未來を歌へる傳道の歌、第四百四十二番で、"Eternal Father, Thou hast said" 『キリスト世にかち あめつちをさむと ちなる御神のみことのかたし』の句に始まつてゐる。これは一八六〇年の作で、日本では明治三十五年一月の盛んな宣教會の席上で、英語の獨唱として歌はれたの

が、恐らく始めてあらう。此の會は當時衆議院議長及び日本基督教會傳道局長であつた故片岡健吉氏の官邸に催されたのであつた。此の Jubilee 曲は、其の時始めて公衆の前に披露せられたので、マクネヤ夫人が、其の前夜この會合のために、作曲せられたのである。

Ray Palmer の名は、一八五八年公けにした "Jesu dulcis memoria" という拉丁讚美歌の一部の英譯によりても聞えてゐる。此の歌は長い間 Clairvaux の聖 Bernard の作としてあつたが、それは誤りで Bernard の生前既に存在してゐたのであつた。其の譯歌は "Jesus, Thou joy of loving hearts" の一句に始まつてゐる。『英語選歌集』(English Selected Hymns) の第三百三十七番だが、日本語にはまだ譯されてゐない。

米國の讚美歌集には、Olivet の作者、Lowell Mason 博士の手になつた作曲が、數に於て、他の米國作家を凌駕してゐる。又多くの讚美歌集についてみる

も、其の數英國の主なる作曲家と比肩すべきものが多い。「さんびか」に收められしものも、此の影響をうけて、二十五曲以上に及んでゐる。現今彼の名聲は衰へたが、米國に於ては音楽家としての彼の經歷が其の基因となつて、四五十年間といふものは實に非常な勢力であつた。彼の生れたのは Massachusetts で時は一七九二年であつた。青年時代に及んで、Georgia 州 Savannah の南部の市に赴いて、銀行業に従事したが、性來の音楽趣味を練つて、遂に教會用樂曲集を編むに至つた。此の種ものは、當時廣く世人の求めてゐたところであつた。されど始め彼が其の編纂を終へ、印刷する爲に、原稿を携へて、北方に赴いたが、經濟上の危険をおもつて之を引きうけようといふ出版者がなかつた。後ポストンの一人が、其事業に興味をもつに到り、己も會の一員たるところから、Handel and Haydn 音楽協會に紹介して、其處より出版の運びとなつた。かくて漸く世に認められ、又上述した世上一般の要求に對して、恰好なる供給

物となつたのである。而して其の名は忽ち擧り、非常な評判となつた。かくて續々版を重ね、二版三版と刊行せらるゝに及んで、編者はつひに意を決して、音楽を職とする事とし、居を Savannah よりポストンに移した。後一八三二年此の地に、音楽學校を起したが、これが助けをなして、同市の公立學校に、音楽を教ふる端緒が開かれた。彼は尙全國に渡つて、定期の音楽講習會を設けたので有名である。其の會の目的は、一般音楽趣味の普及にあつた。彼は米國の實際的な音楽教師として、最初に著はれた人で、其の盡瘁の結果、世人をして優良なる音楽、わけても優れたる教會音楽の出現を求めしむるに至り、自身亦大いに力を致して、人々の要求を充たさうとした。聖曲も、聖曲ならぬも、彼の手になり、又彼の編みしものは、其の數多く到る處に迎へられた。彼が直接に、或は間接其の弟子（彼の門下には名家が輩出した）によりて、米國の音楽界に及ぼした感化は、實に非常なものである。彼はニウヨーク市の大學から音

樂博士の學位を授けられた。アメリカで此の學位を授けたのは、此の大學がは
じめである。

Masonの生涯は、かくも光輝あるものであつたが、一八七二年に至つて、遂
に其の終焉を告げた。

Palmer 博士の歌に附せられた、Olivet 曲の他に、Mason の名を高め、又單
に米國に止らず、廣く海外に知らしむるに至つたのは、Haber の傳道の歌（さん
び、第壹編一五二）（第十一篇参照）に附した曲譜である。

第四

『みめぐみある光よ 日はくれ』 “Lead, kindly light, amid the
encircling gloom.” (さんび、第一編二二一・古今三二九・選歌集一九九)

此の有名な歌は多年羅馬公教の信徒であつた Cardinal John Henry Newman

の手になつた者である。されどこれは新教の歌ともいへよう。ニューマンは、

初め英國々教會の僧侶で、羅馬公教の信者になつたのは、此の歌を詠んで、十

二年も後のことであるからである。

一八三三年の夏、或る事情に促されて、彼は端なくもこの歌を作つたのであ

る。當時彼は英人の僕一人の外誰も連れないで、伊太利に赴いたが、到着後間

もなく病氣に罹り、數週間が程は、何時死ぬか解らないと思はれたくらいであ

つた。併しその病氣も大分薄らいだので、Palermo から、佛蘭西の Marseilles

通ひの小さい帆前船に乗つて歸途に就いた。彼がこの病氣の間、精神上に受けたその経験は、時経て後も全く抜けてしまはなかつた。生憎天候が悪かつたので、此の航海は時を要し又中々退屈だつた。病後早く本復させようといふには、活動なり、運動なりが最も必要で、かく船が遅れるのに氣を使つたりするのは悪かつた。併しニューマンには、將來の事が臆げながら見越しが附いてゐて、彼が沈鬱になつたのも、幾分はそれが原因をなした。又それが動機となつて此の歌を作る様になつたのである。そは、ニューマンが、當時將に英國々教會の上に臨まんとしてゐた、大波瀾の中心人物たるべき運命になつてゐたからである。此の波瀾は、小冊子派運動 (Tractarian)、オックスフォード運動、又は其の領袖の一人なるオックスフォード大學の一教授 Pusey の名に因んで、Puseyism と呼ばれてゐる。

英國は當時、社會上にも政治上にも、急轉直下自由主義に向つて移らんと

する勢であつた。さうなればこれまで Anglican 教會即ち英國々教會に政府から給與されてゐた補助も、全然廢止されるだらうと多くの人が思つてゐた。此の事は多少當時とその範圍は異にしてゐるが、今も猶英國人の間に、むづかしい問題となつてゐる。若し廢止される様なことになる、一般宗教上の見地より、非常に不利であると言ふので、オックスフォード大學に密接の關係を有する國教徒が、盛んなる反對運動を試みた。此の人達は到つて敬虔の念厚く、此の念を適當に人々の間に盛ならしむるには、宗教上の權威を確實に承認する事が必要であり、又國教會は此の目的を達する爲に、必要の者であると信じてゐた。彼等はおほむね、高教會 (High Church) といつて、儀式禮典を重んずる教會主義を力説した。

此等の人々は輿論を喚起する手段として、公開演説をしたが、特に小冊子を作つて之を廣く公衆に頒布した。それは現今傳道用に書いたり、頒つたりする

小冊子の如きものであつた。それ等の中には、宗教的生命の深遠なる問題が、つぶさに論ぜられてゐる。然しその論じ方は殆んど喧嘩腰で、彼等と違つた見解を持つた人々の間に反對の起るを預期してゐた。彼等が叙上の權威の觀念を力説せんとする時、その傾向が殊に著しく、羅馬公教會の主張する所と同一の立場に立つたのである。彼等は從來の英國人に似合はない程羅馬公教に心を寄せ、又宗教改革といふ大事變が起り、これが爲に英國と羅馬とが分離したことを痛く歎いた。彼等はその確信が、何處まで自分達を導きゆくかについては意見がまち／＼であつた。既に述べた如く、ニューマンは遂に羅馬公教に入つたが、又一方には Koble の如く、理論の上からはやはり新教徒として英國教會に踏み止まつてゐた者もあつた。キープルも亦讚美歌作者で、此の物語にも、後にあらはれてくる。(第五篇参照)

少くともそを貫徹させる上に大いなる助となつた。英國の教會は今尙國立教會である。そして所謂『小冊子』及公開演説は、たとへ當時それが強烈なる反感を呼び起し、又ニューマンをして、アングリカン教會を去らしめ、その他は羅馬公教に入る多くの人々を出したとはいへ、活氣ある宗教の勢力を増進する上には、大に力となつたのである。

小冊子叢書の中には、ニューマン自身手を下したものが幾冊もある。而してそれ等は、其の小冊子中に於ても、最も勢力あり、善良なるものである。彼は又聖マリア會堂の牧師として、オックスフォードでした數々の優れた説教―或者は、これを『此の世紀中の最大説教』と稱讚したが―その説教故に、オックスフォードは云ふ迄もなく、全英國に其の名を喧傳せらるゝに至つた。

ニューマンの晩年に起つた此等の事變や、經歷を調べ、振り返つて其の昔彼が身に病あり、心に不安ありて伊太利に旅し、英國に歸つた時の事を考へて見

ると、『みめぐみある光よ』の作が、一層明かになつて來るのである。何故なれば、かの時既に後日の風雨は來らんとしつゝあつたので、ニューマンも豫め之れを知つて居つたのである。そして前にも叙べた如く、彼はそれに關せる自身の運命をも、或程度までは自覺してをつたらしい。『英國で爲すべき事業がある』彼は曾て羅馬にあつた時、羅馬公教會の一高僧にかう言つたが、此の言を發せしめるに至つた確信は、やがて光明—前人の踏んだ事のない、然も甚だ迷ひ易い山路を辿り行く時にも、行く手を示してくれるその光明—に對する熱烈なる祈となつて現はれた。併し當時彼は、其の路が羅馬公教會に達するものだとは思つて居なかつたのである。

此の光明を希ふ祈は、彼と同じ境遇にある基督信者、即ち己に落ちかゝり來る重大なる責任を自覺し、その責任の觀念によつて我使命のある所を自覺する事は出來ても、我身の微力を歎じてゐる多くの基督信者に遍く適用される者

である。『僕の方及ばざる時ぞ主の力現る』といふ獎勵の言葉は、常に耳邊にひびくのである。『わが能は弱きに於て全くなればなり』(コリント後書十二〇九)。而して信者の生涯は、歩一歩と進むべき者で、遠く將來までも見越す必要はないのである。我等が歩一歩踏み出す毎に、足下を照らすべき聖なる光は、神より必ず與へられるのである。こはニューマンの實驗であり、又彼の傑出せる歌の中より受くる教訓であるが、言ふまでもなく、聖なる導を渴仰する者は皆等しく羅馬を目的地として進むとは限らぬ。基督教的實驗が、各人のこゝろに及ぼす影響は、人により各々異つてゐて、ニューマンが發見した平和に至る道は、數ある中の一つに過ぎない。尙他にも種々の道があるのである。例へば或人は、永き懷疑、煩悶の巷に彷徨つた末、此の讚美歌により、又その中に歌はれある恵みと導きとを與ふる神の力により、光明に達し、キリストを愛するに至つた。此の歌が人生の要求に適合する範圍の廣いことは、一八九二年シカ

ゴに宗教大會の開かれた時、其處に集合した、氣分や信仰を異にせる種々なる人々によつて合唱されたと云ふ事實にみても明かだ、かゝる事は主の祈を措いて他に例のない事である。彼が此の歌を作つたとき名づけた歌題は、『雲の柱』といふので、出埃及記十三〇廿一に記しあるイスラエルの民が、經驗せる天父の大なる攝理になぞらへたのである。

ニューマンはロンドンの銀行家の一子で、その母は佛蘭西ヒウゲノオ(Hugue-rot)の後裔であつた。彼はオックスフォードで教育を受けたが、學生として特に勝れた所も現はさずして終つた。彼は一八四五年羅馬公教會に入り、前にダブリンの羅馬公教大學校の校長を勤め、その後一八七九年にはカーチナル(Cardinal)に擧げられた。彼は一八九〇年、八十九歳の高齡に達して世を去つた。

彼のものした讚美歌の價値に關して彼はその歌の世に持て囃されるのは、之に合はして歌ふ John Bacchus Dykes 博士の作 Lux Benigna の譜が、力あるの

だど謙遜してゐる。曾て或人が彼を訪ね「英語を話す基督信者の間に、到る處大事にされてゐる此の様な歌をお作りになつた貴方は、さぞ御満足で御座いませう」といつた。彼は之に答へて「誠に有難う、併し御存じの通り、人氣を得てゐるのは歌でなくつて譜なのです、譜はダイクスのです、ダイクス博士は實に斯道の大家でした」と告げた。此の譜は一八六五年ダイクス博士が、一日ロンドンの海岸通を歩いてゐた時、其の心に浮べるまゝを作つたのであつた。此の海岸通といふのは、ロンドンの最も賑かな大通に當つてゐる。譜はかくも、市中の喧噪極りなき中に作られ、歌は、海上閑寂の中にもなされたのである。我等は、その著しき對照に打たれざるを得ない。

音樂博士ジョン・バックス・ダイクスは、初めケンブリッジ大學に學び、後その校内にある大學音樂會の指揮者となつた。併し彼が勉強の目的は、音樂に非ずして教會にあつたので、彼は遂に英國教會の授手禮を受け、僧侶の生涯に入つ

た。併し彼の名は主として作曲家として著れてゐるので、ダイクスの譜といへば直ぐ、近代の讚美歌中、其の音楽的價値に於て最高最良の者なる事を思はせるのである。彼はその生涯の大部分を聖曲の作成に費し、その同時代の作曲家 Barney, Sullivan 等と違つて、外の者に手を出さなかつた。眞に勝れた近代の讚美歌や、音譜集を参照すれば心づくことであるが、彼は非常に多くの作曲をしてゐる。そして何れも卓越した作である。『さんびか』に載つてゐるダイクスの譜は合計二十曲以上に達し、その内重複して用ゐられてゐるのが數曲ある。彼の手に編まれた者は凡て、三百曲を下るまいといふ。彼は作曲する場合には何日も歌の詞を念頭において、それによく調和させる様にした。彼は人に頼まれてよく作曲したが、それが出来ること、頼んだ人の國教徒、非國教徒たるを問はず、又貴人にあれ、常人にあれ、金持にあれ、貧乏人にあれ、皆『神の御事業の爲め』とて、かまはずそれを與へてしまつた。

ダイクスは一八二三年に生れ、一八七六年に死んだ。そして彼は、自分の關係せる教會は勿論のこと、世界に於ける凡ての新教徒の間に、音楽の標準を高めるに力ありしこと、當時の音楽家の誰にも劣らなかつた。彼は英文『古今讚美歌集』(Hymns Ancient and Modern) 改訂の主動者であつた。これはアングリカン教會で用ゐる主なる讚美歌集で、一八六一年初めて出版になつてから、今日に至るまで、その發賣部數實に三千五百萬を超えてゐる。

第五

『くるあまごころに あまひとノもこ』 “New every morning is the love”

(さんび、第一編二・古今四・選歌集四)

『わがたまのひかり すくひぬしエヌト』 “Sun of my soul, Thou

Savior dear”

(さんび、第一編一〇・古今一・選歌集一〇)

此の二つの中、一つは朝の歌、他は夕の歌で、その英語の原文は “The Christian Year” と云ふ本から取つたのである。此の本には英國々教會の祈禱書中に規定された一年中の教會の祝節、祭日及び毎日曜日に配した歌が、その折々に應じて一つ宛載つてゐる。作者は英國々教會の教師 Rev. John Keble であつて、前條にもちよつと見えてゐる。キープルの名は十九世紀の前半に當り英國々教會を恐しく掻き亂した所謂『オックスフォード運動』即ち『小冊子派運動』に關聯

して、カーディナル、ニューマンの名と密接の關係をもつてゐる。

ニューマンが讚美歌『みめぐみあるひかりよ』を作つてから約十二年の後、此の大紛擾の火中に投じ、その經驗の影響から、遂に羅馬公教會に轉じたことや、キープルが斯る過激の歩調を取らず、國教會に踏み止つてゐた者の一人であつたことは、前にも述べた。しかも此の運動の眞の發頭人と目指されて居つたのは、キープルその人であつた。彼は一八三三年、オックスフォードで有名な説教をなし高教主義 High Churchism を辯護する原則を提供した。此の運動はその原則の上に基いてゐたのである。ニューマンが遂に英國々教會を去るに至つたこと、その今日有名になつてゐる讚美歌を作つたこと、の間には、何か深い關係があるやうにまゝ世人に推察されるが、キープルが生涯アングリカ教會に忠實なりしことや、ニューマンもそれを去るに及んで、戀々として容易に決し得ざりしことは、共に此の推察の不當なるを證明する。『みめぐみある

光』は彼を大争闘中に導いたのかも知れない。併しその光は彼をその青年及び中年時代の家庭の如くなりし教會より去らしめたとはいひ得ない。且今も尙新教徒の生涯の上に、同じ結果を持ち來す力を持つてゐることは斷じがたい。

クリスチャン、イアーは一八二〇年頃書かれたのであるが、一八二七年まで出版にならなかつた。その時まで作者は謙遜して其の本の價値を重んじなかつたが、父の希望や、友人の熱心なる勸告もだし難く、遂に之を公にした。然るにこれが世に出るや否や非常な歡迎を受けた。その歡迎は永く續いて遂に今日にまで及んでゐる。一八五二年迄に四十餘版を重ね、出版部數十萬餘にのぼつた。九十版以上も作者存命中に出版せられ、版權満了までには三十萬部も賣れた。而も此は英國内だけである。小冊子の著者としてのキープルの名聲（前に述べた説教の外彼は八冊の小冊子を書いた）と、彼の優秀なる學識とが、此の成功を收めさせたのであるが、本その物に又充分價値があつた。その扉紙には

『平穩にして依頼まば、力をうべし』（イザヤ書三十五）との句が載つてゐる。この句は凡ての眞宗教の基調を表現して居ると共に此の書の特性を暗示し、宗教的文學書としてそれが有つてゐる力の秘密を啓示してゐる。

政治家にして又慈善家なる Wilberforce に付いて次の様な話がある。彼が晩年に及んで、ある休日、四人の愛兒と共に過さうといふので、其の折各自皆の前で朗讀すべき新刊の本を集會の場所に持つて來ることにした。然るに彼等が集つた時携へて來た本は五冊ともクリスチャン、イアーであつたといふ。

元來キープルが、クリスチャン、イアーを書いたのは、聖文學の爲であつたが、今のべてを二つの歌、殊に『わがたまのひかり』が讚美歌として歌ふに適してゐることは、此の種の讚美歌でこれ程よく基督教信徒に愛唱される者がないと言ふ事實によつても明である。之と肩を並べるのはライトの『日くれて四方はくらく』（第二篇参照）である。

キープルは十年の間オックスフォード大學で詩の教授をした。併し此の教授時代をも籠めて、その最も長き終生の事業といふべきは主として田舎牧師の職であつた。彼は初め歴史に富めるウインチェスター町に近きハースレー村の牧師をしてゐた父なる人の試補を勤め、一八三五年に父死して後は自ら其處の牧師となつた。彼は自分の本から上つた金で、教會と建築とに關して己が豫て抱いてゐた理想に適ふ様な新しい會堂を建てることが出来た。此の會堂はそれに相應しい奇麗な周囲の風物と相まつて、熱心な、且つ收穫豊かなる奉仕の麗はしき繪畫を織り出した。一八六六年彼が死に至るまで三十年以上此の有様が繼續した。オックスフォードでは一分科大學（オックスフォード大學を構成する數多き分科大學の一は實にキープルの名譽の爲に建てられた）を建て、それに彼の名を附けてその記念とした。併し彼の眞の記念物は彼が教に導いた幾千の悔改めたる人々のうちに存してゐる。何故なれば一人の亡び行く靈魂でも之を

救ふことは百千の國に大憲章 Magna Charta (一二一五年英王ジョンが貴族に強ひられて公認したる英國の政治上の自由に關する憲章を指す) を布くにも優つてゐると云ふのが彼の持論である。

キープルはその生涯の隱遁的であつたにも關らず、非常な感化力を有してゐたことは、かの『小冊子派運動』の起つた時、それに關つたアングリカン教會の僧侶が二萬人もあつたうち、ニューマンと共に羅馬公教會に轉じた者は僅か五六十人で、その大多數はキープルと共に彼等が幼少の時から養はれて來た信仰に、忠實に踏み止まつた事實に照して明かの事と思ふ。此の人々がアングリカン教會に踏み止まつた保守主義には種々の理由があるには違ひないが、キープルの勸言及び實例——所謂潔められし分別 (‘Sanctified good sense’)——が確にその重なる理由であつた。且彼は至つて高潔な品性の人で、深い祈禱の生涯を送り、キリストの僕としてその使命を果す爲めに全力を神に捧げた。其の上學者

としての彼の能力、詩的直感、趣味、此等は合して彼が大學に關係してゐた間
 ニューマンの所謂「オックスフォード第一の人物」たらしめたのである。彼が
 偉大なる感化を當代に及ぼした理由もこれによつて幾分か理解することが出来
 よう。彼の勢力のあつたのは彼が教會の上職に居つた爲でもなく、從つて彼が
 宗教上、社會上、顯著の地位に居つた爲でもない。何故なればさういふ顯著
 なる地位に上るやうにと彼は時々強ひられもし、又一度はバーバドース島(Bar-
 badoes)の英國々教會の監督として、年俸二萬圓を給するといふ様な話もあつ
 たが、自身の心も進まず、又父が生きて居る間はその話相手ともなり、協力者
 ともならなければならぬからと斷然之を退けた。通例の人にあつてはその他
 人に及ぼす勢力は主として己が占むる社會上の地位によるが、眞に偉大なる
 人はさうではない。彼等に取つては社會上の地位は勢力を及ぼす上に爾く重
 大な關係がない許りか、時にそれが人生の中で眞に勢力あり、價值ある者、即

ち基督教的品性の活動の妨げとなることさへある。キープルの送つた生涯の外
 形に現はれた理想を言ひ現はした言葉で、今述べてゐる朝の歌、殊にその中の
 次の一節の言葉に及ぶ者は多分あるまい。その原文は次の通りである。

“The trivial round, the common task,

Will furnish all we need to ask;

Room to deny ourselves, a road

To lead us daily nearer God.”

(あした目こめめなば 祝しみちびきて

みくにのたびぢに すましましたまへ)

尚彼の著しい謙遜の一例を示す次の逸話がある。曾て或日曜學校の先生が彼
 に向つて、彼の讚美歌を知つてをる日曜學校の生徒に何か話をして呉れる様
 に、さうすれば生徒等は彼を見、その唇から出る言葉を聞いて、その讚美歌を

一層よく覺えるだらうからと頼んだ事がある。謙遜なる彼は躊躇してその需に應じなかつた。併し先生は尙も益々勸めるので彼も已むなく『では何か歌つて貰へませんか』と云つた。そしてその歌の濟んだ時に彼は懐し相に熟々子供等を見て言つた。『皆さん、只今皆さんは大層美しい調子でお歌ひになりました。私は皆さんもその様に調子よく生涯を送られんことを祈ります。さうすれば皆さんは天の使と一所に歌ふことが出来るでせう。』

キーブルの作つた此の二つの讚美歌は、兩方とも近頃の讚美歌集に載つてはゐるが、後の歌の方が教會に於て一層廣く、一層永く用ゐられてゐる。此の二つの中何方か選べと言はれ、ば誰でも大抵夕の歌の方を選ぶであらう。實際此の様な美しい、優しい言葉が、輕々しく歌はれるとは思へない。此の歌が人々殊に若い者の注意を引く方のある事は、曾てイトン學校で夜の禮拜に此の歌を歌つた時にも、校長が之を認めた。校長のその日の日記にはこんな事が載つてゐる。

た。『居合した學生の中で、歌つてゐない者は一人もなかつた。殊に最後の節は最もあはれで、又最もあはれな調子で歌はれ、これを聞く者をして、學校は、多くの靈魂や心を作る場なることを思はしめた。』

『あした目さめなば 祝しみちびきて

みくにのたびちに 進ましめたまへ』

『さんびか』にも『古今』にも、キーブルの名がもう一つ出てゐる。それは結婚の歌で、

『いもとせの道を ひらぎたまひて』 “The Voice that breathed o'er Eden

(さんびか第一編三八二・古今一五〇)

と言ふので初つてゐる。此の歌は一八五七年に作られたもので、他の歌と同じくよほど廣く用ゐられてゐる。當今結婚式にうたはるゝ者の中では、最も麗しい一つであるから、それも當然なことであらう。

キーブルは一七九二年に生れ、一八六六年に、七十五歳で死んだ。彼は幼少の時、父の指導の下に家庭で教育を受け、後オックスフォードにはひつたが、學校での彼の進歩は實に目覺しかつた。然も彼は其の時代なほ非常に若かつたのである。彼は僅十八歳にしてオックスフォードで、Double first class honours といはれてをる名譽を以て其處を卒業し、續いて校實に擧げられた『フェロー』と言ふのは全世界とまでいはなくとも、全英國に於ける學者最大の榮譽であつて、多くこれがために相競ふのである。

一八四六年、キーブルは Lyra Innocentium といふ子供に就ての詩一卷を公にした。それは基督教を信する子供のことや、その遣方や、その特性などに關する思想を韻文に綴つた者である。彼は又屢々他の者も書いたが、その主力は純智的の方面ではなく、いつも教區内の利益のことに注がれた。

此の二つの讃美歌は種々な譜に合せて歌はれてゐる。特にその爲に作曲され

たのも二三ある。『さんびか』と『古今』の内に編入されてゐる Hursley の Dix といふ二曲は獨逸系の者で、初は全く違つた方面に使ふ爲に作られたのである。ハースレーの譜は、一七七五年に出版された Katholisches Gesangbuch のハースレーの聖歌集の中に出でゐるから、多分その頃の者であらうが、まづ今の様な姿になつたのは、一八一九年、Leipzig で出版された新教徒の Chorale Buch といふ、此の曲を収めた讃美歌集の現れた時からであらう。此の譜のキーブルの讃美歌と組み合せられたのは一八五五年の一寫本の中に載つてゐるが、それ以前にはそんな形跡はない。一八六一年に、かの大著『古今聖歌集』が初めて出版になつた時、これをその寫本から移して、Pascai といふ前の名を廢し、ハースレーといふ適當の名を付けて、此の歌集の中に編入したのである。

デイックスの譜は、Conrad Koehler (一七八六—一八七二) の作を整調した者で一八三八年に現はれた。コッヘルはオルガンの妙手であり、又作曲家であつて、幾

多教會用の樂曲集を編纂した。彼は Leider Kranz 即ち聖歌學校を建設した。此の學校は今尙存してゐて、獨逸教會に四部合唱を盛ならしめ、又祖國全般に亘つて音樂趣味の増進を計る有力なる機關となつてゐる。

『わがたまの光』は屢々 Melcombe といふ古い譜に合せて歌はれる。此の譜は一七九〇年 Samuel Webbe が作つた者で、『さんびか』第一編の第一、第四〇五、『古今』の第五、第一九九に出てる。(ウェッブのこゝは第三十一篇参照)

第六

『かみはわがやぐら わがつよまたて』“A mighty Fortress is our God”

(さんびの第一編四三七・選歌集五四)

獨逸基督教の最大人物 Martin Luther が作つた此の獨逸讚美歌中の大作には、之を生み出したかの宗教改革當時の特徴がよく現れてゐる。此の歌にはルーテルの絶倫の精力、眞率、確固たる信念、偉大なる勇氣が満ち溢れてゐる。かゝる特性は當時の危険争闘の中にあつて、自然に發達した者である。此の歌は、ルーテル派の教會で、最も愛唱されてゐるのみか、廣く獨逸國民の國歌となつてゐるのである。

此の讚美歌の出來た時日は正確には解らないが、とにかく一五二〇年から一五二九年の間の作であらう。何故なれば此の歌は一五二八年、さなくば遅くと

も一五二九年に出版されたらしい讚美歌集には載つてゐるが、一五二四年印刷のルーテルの讚美歌集には見えて居ない。若し其の時既に此の歌が出来てをたなら、その歌集の中に入れあるべき筈である。

或人は又、此の歌の起原は、ずつと溯つて一五二一年ルーテルが、羅馬公教會の教理に對し異端を唱へる者として、審判を受ける爲にかの歴史の上に名高い Worms 會議に召喚された頃であるといふ説を抱いてゐる。これはいふ迄もなく、ルーテルの身に取つて實に一大事の時であつて、若し命令に従つて此の會議に出席すれば、殉教者の運命を免るゝ望は殆ど無かつたのである。彼がウルムスに赴く途中、悔いても及ばぬ迄にならないうち、早く引返す様、切に勸める者があつた。然るに彼は「譬へウオ、ルムスに集ふ惡魔の數が屋根の瓦の如くあらんとも我は行く」と、後々まで傳へらるゝ言をもつて、之に答へた。

此の時の審判官は法王廷の代表者並に同時代に於ける此の世の力の代表者で

あつて、皇帝自ら臨場になつたのである。さればルーテルにとつては、此の時こそ、世に類なき壯嚴なる會議の席上にて、キリストの御方として、信仰の純潔と自由との爲に戦ふべき屈竟の機會であつた。

ルーテルが生涯に於ける此の危機に際し、先の歌を作つたといふ推測は、誠に自然のことであつて、その歌の中に起りきたる思想と、前に擧げた彼の言葉とが相一致してゐること―三節「惡鬼は世にみちて」を見よ―は此の見解を一應尤もなと思はせる。事情と歌との此の關係が若しも成立し得る者としたならば、誠に美しくもあり、興味のある事でもあるが、前に述べた通り、一五二四年の歌集の中に此の讚美歌は載つてゐない。此の事實は前の説を斥け、更に其の後ルーテルの生涯に起つたことで、かくも激烈に惡魔の力を斥け、神に信頼する心を起さしめた様な事件がありはしなかつたか如何かといふ事を檢べて見る心を起させる。實際斯る事件が一五二七年に起つたのである。それは歐羅巴

に悪疫が猖獗を極めたといふことで、此の時に於ける人民の恐怖艱難は實に言語に絶し、彼等は當時の信仰に基き、かゝる悪疫の流行を『よみのをさ』その者の奸計に歸したのである。此の問題に關する有力なる説は後者を以て最も確らしとする。我等も亦此の邊で満足しなければならぬ。

宗教改革の歌が宗教改革派の教理を人々に認めしむるに大いなる力のあつた事は、聖歌學上興味のあることである。これ一つには禮拜の時に會衆一同が讚美歌を歌ふ様になつたからで、以前讚美歌は羅馬公教會の唱歌隊が歌ふので會衆が歌ふのではなかつた。然るに此の時一般會衆用の讚美歌が現れ、會衆は之により歸依、讚美の聲を擧げて神の彼等に語り給ふ御言葉に應へまつることが出来る様になつた。此の種の讚美歌が使用せらるゝや、忽ち効果現れ、その影響する範圍は廣大であつた。當時『皆々（獨逸人を指す）ルーテルの教理に身も魂も入れて歌つてゐた』といふ。

實に靈の戦にあれ、肉の戦にあれ、身親しくその衝に當つてゐる人々の叫びが歌となつて一致結合する時、そこに偉大なる力が生じて、勝利を得るに至るのである。靈感、鼓舞、熱誠こゝに湧き來り、期せずして惡と戦ふ軍隊の補充は行はれ、熱望せる目的を達するの武器は、鑄造せらるゝのである。かの宗教改革の旗は、獨逸の戦ひの讚美歌の歌聲と共に擧がつたのであるが、その歌の中、ルーテルの Ein Feste Burg（獨逸原歌の首句）の曲ほど、精神界の軍歌として、功を奏した者はなかつた。かの有名なる佛蘭西の軍歌、Marseillaise の曲は、時代の英雄 Napoleon の指揮に對する兵士等の信仰の力と相待つて革命當時の佛蘭西軍をして、斯の如く向ふ處敵なきに至らしめた。さればルーテルの歌は宗教改革のマルセーユと呼ばれよう。我等は又自然かの Cromwell の鐵騎隊（Iron-sides）が光榮ある勝利に向つて進軍しつゝ、歌つた歌や、かの有名なる瑞典王 Gustavus Adolphus の軍隊の歌つた歌などを想ひ起す。此等の軍歌は多く David

の詩篇を翻譯した者か、或ひは意譯した者で、例へば此のルーテルの歌は詩篇四十六篇を土臺とした者、少くともそれから暗示を得たものである。今日まで残つてをる記録によれば、當時の人々は家の中にあれ、町の通りにあれ、恰も一團體の如く、一人が此の歌を歌ひ出すと何處からともなく他の聲が之に應ずる、それに又他の者が加はるといふ様な具合で、遂には何十人、何百人の人々が皆調子を揃へて此の歌を歌つたといふ。之を考へると、近代に於ける米國の殉教者 McKinley 大統領の棺が墳墓に收められた時『主よみもとに近づかん』(“Nearer, my God, to Thee”) (おんび、第一編二四九・古今三四九)の歌が全米國民に歌はれた光景が思ひ出される。(第八篇参照)。此の歌はかの政治家が生前、好んでをつたのだといふ丈である。しかるにルーテルの遺骸がその永き眠りの場所に持ち運ばれんとした折には、彼自身の手になつた此の歌が、國民の悲哀、號哭の中に、その棺の側で歌はれた。彼に對しても亦、異なる意味で

『かれ死ぬれども信仰に由りて今なほ言へり』(ヘブライ書十一〇四)といへよう。ルーテルの友にして且つ協力者なりし Melancthon が、ルーテルの死後程なく己が身の逮捕、迫害の危険を避けてその家を通れ出でたことがあつた。そして彼が全く失望落膽の淵に沈んで居つた時、とある子どもが『かみはわがやぐらわがつよきたて』といふこの勇ましい歌を歌ふのを聞いた。其の時此の歌が彼の心中に齎した喜悅、慰安は、そもいか計りであつたらう。歌の作者は死ぬ、併し其の歌は残り、疲れたる人はそれを聞いて慰を得、戦へる人はそれに勵まされて益々戦ふ。政治家も農夫も各自その負ふ心勞、責任は同じからねど、皆等しく分に應じて此の歌の恵みに浴するのである。歌ふ人の口の上此の歌は恰も價なしに與へられる一杯の冷水の様な者である。歌は何氣なしに歌はれても、内に籠れる恵みは尊い。眞の讚美歌作者の最大の希望は此の恵を傳へるにある。一五六〇年から一五七二年の間、佛蘭西のヒウゲノー教徒が迫害の犠牲と

なつた時、此のルーテルが物せる歌を歌つて精神的慰安と獎勵を得たると、現時、獨佛二國が戰をなすに鑑みて、其の著しき變化に驚かざるを得ない。常にアイン、フェステ、ブルグ“Ein Feste Burg”に合せられ、それをとり離すのは殆どなすまじき者の如くに思はれる程になつてゐる譜も、亦ルーテルの作と言はれてゐる。併し彼がその名譽を受くる權利があるか如何かは疑問である。といふのは此の譜の特徴は、永い間教會で用ゐなれてゐた Gregorian 調と選ぶ所がないからである。さればルーテルは單にあるグレゴリアン調を選擧したに止まり、その調が漸時變化して今の様な姿になつたのであらう。此の譜は確に歌として作り合せてゐる。Carillon が曾てこの歌を獨逸語の原文から英語に翻譯しようとした時、此の歌には『アルプス山の積雪の音、近づききたる地震のどよめき』があると言つたが、此の譜に合せて更に其の言の適切なるを覺える。

第七

『みよやじふじの 旗たかし』“Onward, Christian soldiers”

(さんびつ第一編二七三・古今三三六・選歌集二九〇)

今より四十年許り前、英國の或學校では、生徒等が行列をなしつゝ、此處彼處練りゆくをりに歌ふ歌が入用であつた。讚美歌『みよやじふじの 旗たかし』は、この必要に應じて出來たのである。作者は Yorkshire なる英國々教會の一教區の牧師補で、役目柄その教區内の生徒が出てゐる學校とは密接の關係があつた。其處の學校の祭日は、アングリカン教會で使ふクリスチャン、イアー(キリスト教會年中行事)に制定されてゐるホイットマンデー Whit Monday をいふ復活節から第七週めの月曜を選んで、行ふ習慣であつた。それで此の歌は、一八六五年のホイットマンデーに歌ふ爲に作られたのである。

作者は Rev. Sabine Baring-Gould である。其の年その學校では、隣の教區の學校と一緒に祝祭をするといふので、一同其の隣教區内に集合することになつた。それでバアリング・ゴールドの學校の生徒は先づ一つ所に會合し、それから一團となつて其の集合地點へ向ふ手筈であつた。作者は當時の事情を説明して斯ういうてゐる。「子供等が隣村へ進み行く時に、自分は何か歌はして見たか。併しこれぞと思ふ歌も考へ出せなかつたので、その前夜、何か自分の手で作つて見ようと思つて机に向つた。そして出来上つたのが「みよやじふじ」の歌である。彼は當時自分の作つたその歌が後の役に立つとか、それが遂に世界中の教會で用ゐる讚美歌になるなどは思ひも掛けなかつた。併し其の歌は將に斯くあるべき前途を有つてゐた。

此の歌が若い者ばかりか、あらゆる年配の人に適してをることは早くから認められて、間もなく英米のいづれの讚美歌集にも大概編入される様になつた。

此の歌が最初印刷せられて世に出たのは The Church Times (教會時報) といふ宗教雜誌に掲げられしに依るので、それは此の歌の書かれた年のことであつた。行列唱歌用として之に勝る歌はまづない。我等は此の歌を歌ふとすぐ、其の初 子供等が「翻々として翻る十字の旗を先に立て、道々、勇ましく歌ひながら」かのヨークシアアの丘を越えて、進んで行つた光景を眼の前に浮べる。併しながら禮拜を助ける手段として、行列をして練り行くやうな事を餘りしない聖公會以外の教會でも、集會の時此の歌を歌うて、等しく靈感、獎勵を得るのである。實際此等の點に於いて、其の勢力、價値の、いづれの時代にも、いかなる信條を奉ずるものにも當嵌る事、此の歌の如きは、數ある讚美歌の中にも其の例を見がたい。

然るに福音士 Moody が、此の歌には虚榮の精神が歌はれあり、且實際此の世に存在し得ざる信徒の勇氣や、目的の一致などが見せ掛けてあるからとて、

彼の集會では何日も之を歌はせなかつたのは面白い事である。とはいへかの儀式を重んずるアングリカン教會の人々も、單純にして文字通りに聖書を信ずる信徒も、たとへ兩者席を同じうして歌ふことをせず、外見上分離を標榜して居りながらも、均しく此の歌を用ふるといふ事實は、其の根本的一致性を示して居る者である。(ヨハネ傳第十七章に記してあるキリストが祈り給ひし一致とは之を指すのではあるまいか。此の一致性は眞の基督教國民の一大團體の特性にして、其の特性は時の經つに從つて益々顯著になる者である。

今日此の歌に合せて歌ふ譜 St. Gertrude は Arthur Sullivan 卿 (一八四二年生る) の作である。一八七一年彼が此の譜を作つた時は單に日曜學校用として、なく、宗教上それ以上に何かの爲にならうか、教會一般に用ふる歌としては、調子が活潑過ぎやしないかと案じてゐたといふ事を聞くと思はず微笑まれる。併し此の言葉によつても如何に此の譜が軍隊式であるか、窺はれる。されど實

際此の譜がバアリング・ゴールドの歌にしつくり調和して行くのも、其の歌が教會で用ふる行列唱歌の中で最も評判がよく、最も多く用ゐらるゝ歌になつたのも、此の譜の勇壯なる特質が大いに助けとなつてゐるに相違ない。此の歌の評判は實に盛んで、若しも此の歌が歌はれなくなる時が来るなら、それは恐らく『餘の反覆によつて生じた飽き氣味を轉ずる爲であらう』と或人が言つた程である。

此の方ある歌の作者も、作曲家も共に有名な人である。作曲家サリヴァンは英國の音樂社會に於て人々に羨まるゝほどの高い地位に進み、一九〇〇年、齡五十八にして世を去つた。本書を物するに當つて特に彼に注意を向けるのは、主として彼を作曲家と見ての上である。英米の勝れた讚美歌集の作曲家索引中、個人別として、其の作曲の數、他に飛び離れて多き者三四名あるが、彼は實にその中の一人である。彼が曲の常に調子良く、音樂的なることは讚美歌第一

編六三の Noel, 同く四二二の Samuel, 及び第二編三〇〇の Angel Voices, 同く一三八の Courage Brothers の如き者を檢べて見れば解る。殊にサムエル曲の如きは、眞に『靜謐、平和の全き玉』である。

サリヴァンは音楽家の子で、子供の時、Windsor の王立會堂の齊唱者の中に入り、訓練の功空しからず、遂に音楽の懸賞募集に當選し、尙その資をもて海外に遊び、斯道の蘊奥を極めた。彼と此の賞與金を際疾く競ひし者は誰あらう、後日有名になつた Joseph Barnby 卿 (第三十篇参照) であつた。當時、數ある競争者中、バーンビーは最も年嵩であり、サリヴァンは最も年若であつた。兩人の力は正に互角で、其の優劣を決する爲に再度の審査を要した程であつた。

サリヴァンが彼の比較的短い生涯の間に、音楽上になした活動は實に變化に富んで居た。彼は聖、俗、莊重、輕快様々の作を試み、それらは又何も勝れてをる者であつた。作曲の傍ら、彼は讚美歌編纂の事業に關はつた。一八八一年 S

P. C. K. (基督教智識振興協會) から出版した有益なる讚美歌集は、彼の編纂になつたものである。

基督教の教會が、其の禮拜に用ふる讚美歌の作曲者に負ふところは、決して歌の作者に負ふ所に劣らない。最上の譜は最上の歌の如く、敬虔、同情の念に満ちてゐる人々により作らるゝので、燃ゆるが如き宗教的熱誠が籠つてゐる。かかる傑作に附隨する光榮に浴する者、今や其の數も増し、サリヴァン、ダイクス、バーンビー、Stanley 等は、宗教的音樂の作曲の方面に於て、不朽の名を止めてをる。

作曲家サリヴァンは既に世を去つた。併し讚美歌『みよやじふじの旗たかし』の作者は猶健在である。而して今や八十一歳の高齡 (一八三四年生) なれども驚くべき變化ある活動的生涯を續けてゐる。彼は此の歌を作つた時と同じく今猶牧師をしてゐる。彼は又英國の地頭ともいふべき、一地方の役人を勤め

てゐる。かくの如く聖、俗二重の義務、責任を身に負へるにも拘らず、彼は多作家にして、而も其の取材の範囲は廣く、神學、歴史、考古學、比較宗教にまで及んでゐる。彼は又小説家として成功した。その上彼は氣品のある勝れた詩人でもある。彼の歌は此の他、なほ一つ讚美歌に譯されて第一編四一三に出てゐる。これは子供の夕の歌で、『ゆふ日おちて そらくらく』“Now the day is over”の詞で始まつてゐる。此の歌は、一八六五年の作で、單純、美麗なるを以て名高い。

第八

『主よみもとに ちかづかん』“Nearer, my God, to Thee”

(さんび、第一編二四九・古今三四九・選歌集一五二)

本書第六に於て米國大統領マッキンレーの生涯及び其の悲劇的最後に付一言した時、はからず此の名高い歌に説き及んだ。併し既にかの出來事あり、且つ過去五十年の間、基督教國の禮拜式に於て此の歌を取り分け多く用ゐてゐる以上、尙之を敷衍するのも強ち不當の事であるまい。『主よみもとに 近づかん』とは一九〇五年九月の日の、彼瀕死の大統領が發した最後の言葉であつた。此の歌は彼も言うて居る如く、彼の一生涯絶えざる祈であつた。『のぼる道は十字架に ありともなご かなしむべき』嗚呼彼は、己れの負ふべき十字架を どんなものだと思つて居たであらうか。

マッキンレーは公の義務を盡しつゝ倒れたので、或意味からいへば國民の爲に生命を捨てた者でかの歌を實現したのである。彼の最後の言葉を親しく彼の口から聞いた人々が之を世に發表した時、その言葉はかの恐しき變事に驚かさず、その國民に及ぼす大いなる損害を覚え、悲歎にくれてゐた人々の心に入り、思に入つた。暗殺のあつた次ぎの日曜日には國中の教會及びあらゆる追悼會で此の讚美歌を歌ひ、音楽隊は此の耳なれし歌を奏して町々を巡り、町の子供らや道行く人は、屢々その周圍に集ひ、ともに此の歌をうたつた。埋葬の當日には豫ての手筈により午後三時半から町々のあらゆる交通がとまつて、五分間、死の如き静寂が續いた。電車に乗つて居る者は立ち上り、町に居る者は帽子を脱り、各自居合せた處に静止した。ニューヨーク市では、群集が市の重なる二箇所の辻公園に集ひ、静寂の時が切れると同時に、樂隊が『主よみもとに』とそれに次いで、之もやはり故人の愛吟であつた『みめぐみある光よ』（第四篇

参照)との曲を奏した。奏樂中人々は皆脱帽のまゝ大多數の者と迄はいへなくとも、多くの者は以上の二つの讚美歌を歌つて之に合せた。凡てかゝる事は人民の感情をよく現はしてゐた。殊に故人に對する尊敬の念が最も目立つてゐた。此の歌の様に國民的歡迎を受けた歌はルーテルのアイン、フェステ、ブルグ(第七篇参照)を措いて他にない。

用ゐられてゐる譜は Behnny と呼ぶもので『さんびか』にも、『古今』にも此の譜で出てゐる。それは一八五六年作者不詳の曲をロウエル・メースン博士(第三篇参照)が、整調したもので、そのまゝたいち世に廣まつた。米國では大概何處でも此の譜に合せて歌ふのであるが、獨り英國ではダイクス博士(第四篇参照)の作で、是より立ち勝つて居る Horbury といふ譜か、さもなくばサラッアン(前篇参照)の作ラテン名 Proprior Deo といふ譜を用ゐてゐる。

此の歌は Sarah Flower Adams 夫人(一八〇五年生)の一八四〇年ごろの作で

ある。彼女は英國の政論家にして政界の急進黨に屬するフラワーといふ人の娘で、後土木技師 W. B. Adams の所に嫁した。彼女はユニテリアン教徒で、それに暫くの間英國劇場に關つて之を道徳の改善及社會の向上に資する所あらしめんと志を抱いて居つた。併し健康も勝れず逆も自分の力では此の大事業の企て及ぶべからぬを覺り、意を翻して文學研究に身を委ねた。併しその不朽の作としてはこの『主よみも』に近づかんがあるのみで、他にこれぞと言ふ程のものも出来なかつた。此の歌は、一八四一年出版のユニテリアン教會の讚美歌集に、始めて載つた。作者の死んだのは、それから七年後即ち一八四八年のことで、齡僅かに四十三であつた。

此の歌はもとユニテリアンの者だといふので、初めの内は正統派の人々の間には餘り迎へられなかつた。併し譬へ歌の中にはキリストの人格や事業のことを少しもいうてなくとも、舊約聖書思想、幻想が満ちてゐるのである。(創世

記第二十八章一一一九。而して此等の觀念は神の攝理により、よしそれが如何なる文學的形式を備へてをるにしても共に基督の教會の嗣業である。斯の如き遺産を藏する此のアダムス夫人の歌は之を用ゐるにつれ、その惠は全世界、あらゆる型の基督教信徒に及び、かの當初ふとした事から起つた偏見も、つひに消えてしまつた。

基督教徒の實驗に現はれたかゝる惠の例は數多くある。併し南洋に於ける Fonga 島の一土人の話程痛切なのは他にあるまい。これは事實をよく知つてゐる或宣教師のした物語である。「或日のこと、たまにしか行くことの出来ない小さい珊瑚島へ私が巡廻に行つた時に、私は數年前改心した一老人が、死に瀕してゐるといふ事を聞いた。急いで其の小屋に行つて見ると奇妙な光景が目撃された。老人は其の室に差し渡してある梁に抱き付き、身を支へながら、半ばぶら下り氣味になつて眼を閉ぢ、苦痛の色をその面に現はし、何か呟いてゐる

たが、私には最初それが何だか解らなかつた。私は何か遺言でもしたいのではないかと思つて近づいて見ると、豈計らんや老人が繰り返し繰り返し口にしてゐたのは「主よみもとに ちかづかん」の歌と同じ意味のものであつた。かの教養ある英國婦人の歌は其の當時まだ此の島の人々には知られてゐなかつた。併しながら彼女の信仰を鼓吹してかの歌を書くに至らしめた靈は、此の隣むべき無學な基督教徒トンガの土人の心の中にも、同じ精神を鼓吹したのである。

此の歌を研究すると、人々は一般に之を歌ふ時にその歌の眞の意味に氣を付けてゐないのではないかとの疑惑が起る。神に近づく道の狭くして困難なることは、誰しもよく経験する所であるが、此の歌には必要ならば如何なる困難を冒しても猶神に近よらんと願望がある。併しながら性來放縱なる人が如何してかゝる歌を口にし得ようか。ところが不思議にも明かに氣の進む筈のない此

の歌を自分の愛吟であると揚言する人が屢々ある。人の胸の中を知り給ふは神のみなれば、此の様なことは軽々しく判断を下し去るべきものでないが、どうも矛盾してをるやうに見える事がある。故 Edward 第七世陛下は、此の歌の如くあはれ深く眞に人の肺肝を衝くのは、他に其の例があらうとも思はれないと仰せられたと言ふ事である。その證據としては Titanic 沈没の時の出來事確かな者はない。時は一九一二年太西洋航路汽船タイタニックが冰山と衝突して果敢なく海底の藻屑となつた。船が刻一刻と沈み行く時その甲板上に立つて死と顔を合せてゐる幾百の男女の口の上つたのは、このアダムス夫人の歌であつた。少數の者これも重に婦人や子供達だけであつたが、それが有り合ふ數艘のボートで逃れ去つた後、残りの人々が此の世の名残りに歌つたのは此の不朽の歌で、その聲は氷の如き海面に響き渡り高く天の御座にまで達したのである。

第九、第十

『うき世のさかえは われのぞまじ』“Father, whatever of earthly bliss”

(おんびり第一編二二〇・選歌集一九八)

『きみなるエスよ けがれしわれを』“Take my life and let it be”

(おんびり第一編二六三・古今二九九・選歌集二六一)

『かみのたまふ 平和こそ』“Like a river glorious”

(おんびり第二編一四六・選歌集二一四)

『かへりきたる あたらしき』“Standing at the portal”

(おんびり第二編二三八・選歌集三三〇)

『わがきみエスよ われををしへて』“Lord, speak to me, that I may speak”

(おんびり第一編二八九・古今二〇六・選歌集二七四)

斯く讚美歌を研究するに當り、先づ見逃すことのできない尙二人の閨秀作家

がある。彼等二人の特性が、著しく似通つてゐるところから、讚美歌學上屢々並び稱せられてゐる。されば今こゝに、二人を一所に擧げて、不當ではあるまい。

其の一人 Anne Steele (一七一六—一七七八) は、他の一人 Frances Ridley Havergal (一八三六—一八七九) に先だつこと、ちやうど百年であつた。何れも、特別の意味で、其の生れた世紀に屬する者と考へられてゐる。スチール女史は、雅號を Theodosia としたか、ハヴァーガル女史は、『十九世紀のセオドシア』と呼ばれた。女史が當時の讚美歌界になした數多の貢獻は、其の量といひ、質といひ、また其の世に及ぼせる感化といひ、さながら前世紀中スチール女史のなした所と伯仲してゐるからである。

アン・スチールの父は Baptist 教會の牧師であつた。彼は材木商を渡世として、傍ら、Broughton の Baptist 教會の無給牧師として働いた。ブロートンと

いふのは、Winchester & Salisbury なるいふ寺院町に近き、一小村である。アンは、此の閑静な教区内で一生を終へた。ながい間の不健康、それに許嫁の夫に死なれて、切ない悲しみを抱いてをつた。許嫁の人は、結婚式の擧げられる僅か数時間前、水に溺れて死んだのである。以後女史は、獨身で通したのであつたが、其の歌には、時々スチール夫人といふ名が附いてゐる。これは現今博士の學位を實際有つてをらぬ人々を、何々博士と呼ぶやうに、當時の習慣で、かく丁寧と呼びなしたのである。

スチール女史の作は『さんびか』に二つ載つてゐる。即ち前に擧げた二百二十番と、三百五十三番の『たえぬひかりかやきつ』(Far from these scenes of night)とである。何れも女史の受けた試練の生涯や、神の御心に對する穩かなる而も動かす可らざる服従の精神が現はれてゐる。全教會の多くの人々は、此の例に倣つて、大なる恵を得た。女史の歌は、此等の人々の慰めの泉となり、

又靈性を高うする助となつた。

女史の手になつた數多の作は、近頃めだつて廢れて來た。これは文學上の價値を定める標準とか、宗教的感情とか、此の感情の表現の仕方とかに變化を來した爲にも由るけれども、讚美歌集編纂の際にも、禮拜の時にも、役に立つ歌を擇ぼうとすると、昔に比べて現代に、さういふ歌が遙かに多い事實に基くのである。さはいへ、當時は其の歌は非常に行はれた者で、Phillips Brooks (第三十六篇参照)が後に牧師となつた、アメリカのボストン教會で作つた監督派の讚美歌集にさへ、總數百五十二首の内、彼女の歌が五十九首も入つてゐた。バプテスト教會の歌集に、彼女の歌が澤山出てゐるのは、當然の事であつた。實際、百年前は、バプテスト派の歌集にも、他の教派の歌集にも、其の歌の數の多きこと、ワッツ博士(第十二篇参照)を措いて、彼女の右に出づる者はなかつた。ワッツ博士は、一七四八年に世を去つたのであるから、博士の晩年は女史の初年に

相當する。それ許りか、兩人の棲家は、十五哩しか隔つてゐなかつた。英國に於て、讚美歌作者として最初に名をなした者は、男ではワッツ、女ではスチールであつた。女史の名高くなつたのは、幾分かこれに由る。併しながら明かなる詩的天才と、燃ゆるが如き敬神の念とが、世に認められなかつたら、斯くも著名になる筈はない。此の敬神の念こそ、常に力ある感化を人々の上に及ぼすものである。

『うき世のさかえは われのぞまじ』は、スチール女史の作中、現今最も廣く歌はれてゐる者である。此の歌は、大勢集つた禮拜式などよりも、獨り室に居る時歌ふに適し、病める者、惱める者に、特に慰めと力とを與へる。これは、女史が前に擧げた、若い經驗を味つた時、書いたこの話であるが、確かな所は、其の歌の載つてゐる『主として敬虔なる詩歌』といふ其の集の出た日附より、溯ることは出来ない。此の詩集は、一七六〇年に出版されたのである。

讚美歌第一編三百五十三の『たえぬひかり かゞやきつゝ』も亦此の詩集の一七六〇年版に、初めて出たので、それから太西洋兩岸の基督教徒間に、遍く用ゐられ、又譯されて他の國々へも傳はつた。

前に擧げた初めの方の歌に、普通合はせて歌ふ Naomi の譜は、 Hans George Ziegler (一七六八—一八三六) の作つた曲を、ロウエル・メーソン (第十一篇参照) が、整調した物で、歌によく合つてゐる。チーゲリは、瑞西の作曲家で、聖曲や普通の曲譜の出版者であつた。彼の曲で、猶一層名高いのは、第一編三百二十二に出てる Dennis のもののである。

十九世紀のステール女史ともいふべきフランシス・リドレ・ハヴァガも、やはり牧師の家庭に育つたのであつた。併しステール女史のと違つて、父なる人は、英國國教會の牧師であつた。父は名を William Henry Havergal といつて、讚美歌の作者で作曲もしたが、『さんびか』には唯作曲家として、第一編

七十六に出てゐるだけである。彼は、歌の作者として、作曲家として、且つ又讚美歌文學上に或る貢獻をした人として、知られてゐるが、殊に此の氣高い娘の父として、有名なのである。

ハヴァーガルの嬢が、英國の讚美歌作者中有數の地位を占めてゐることは、大抵どの讚美歌集を開いて見ても、其の名が載つてゐるので解る。女史が斯く名高くなつたのは、勿論秀でた文學的の才能があつたにも由るけれども、其の主因は、基督教徒の聖別といふ思想をつねに高調したからである。これは女史が身に受けた基督教的實驗から起つた思想で、前に擧げた讚美歌の中に、其の徑路が明白に示されてゐる。一八七四年のことであつた。女史は或る時、友だちの家を訪問した。其の家には、まだ悔い改めない人もあり、又悔い改めて教會の會員となつても、未だ「喜べる信者」と、告白し得ない人もあつた。女史は、常の如く熱誠罩めて、皆の者が身も靈も全く神に捧げ、それによつて天よりの

恵を受けるようにと祈つた。而して其の祈禱は、家を立ち去らぬうちに、聴かれた。女史の歡喜と感謝とは、溢れて『きみななるエスよ けがれしわれを』の歌となつた。「出立の前夜は餘り嬉しくつて寝つかれず、殆んど一晩中神を讚美し、更に我が身を聖別した」と、女史は其の翌日人に話した。此の歌は、女史一流のよみくちである。女史は全體の中心思想を叙述するに當り、殊更に努力することなく、恰も神の靈の口授せらるゝ儘を書き取る如く、行は行を追つて、胸に浮び、遂に英語の原文にある“Ever, only, All for Thee”に達したのである。かく靈の示しをうくるをり、思ひ浮ぶ思想も言語も、ひとつゝ特に我が祈りに答へ給ふ神の御言葉よと、考へられたことは、尤もながら、其の作が、最上の讚美歌たり、はた普通の詩の佳作たるべき文學的潤色を缺いてゐることは免れない。例へば、テニソンの詩の如き、彼の如き天才の手になりながら、それがあれほど世間の賞讃を得るには、幾多の推敲が、此の大詩人の手によつ

てなされたのである。ハヴァガルの歌を模範的文藝品とするだけの自由が、女史にあつたなら、今よりも立派な作になつたらうと、批評家は思うてをる。併しながら、祈りに答へて神の降し給ひし物を變へるといふのは例へて韻語を一つ變へるのさへ、眞に聖められたる信徒の實生活に於ける、祈禱の意味に關する女史の解釋と相反するのである。女史は屢々、其の歌を紙片一例へば古い封筒の裏なごに、零碎な時間に書き附けた。そしてそれ等は、原稿としてそのまま、保存せられた。讚美歌集に刷り込まれたのも、殆んど修正を加へたあとながないのである。

これを聞くと、一八六三年、列車の中で、新聞の包紙を破いて書き付けたといふ、Lincolnの有名なGettysburgの演説が思ひ起される。大統領が、これを居並ぶ軍人の前で朗讀した時に、聴衆の中一言も發する者がなかつた。これは全く、其の語調の並びなく壯麗なのに打たれてたからであつたが、リンカーン

は、彼の努力が、惨めな失敗に終つた様に思つた。併しこれは、其の生涯中の一大傑作であつて、彼の記念として、人々の心理に、永く刻まれたものである。

ハヴァガルの女史の智力は、疑ひもなく優れてをつた。これは女史が聖別を理想としてをる點から、特に興味がある。女史は秀でた語學の才を有つてをつた。又音楽者として勝れ、音聲もよく、ピアノの演奏も上手で、自ら望まば、立派な音楽家として、世に立つことが出来たのである。女史は實際、音楽家にさう勧められた。併し基督信徒の義務、即ちキリストの腹心の御弟子として、聖職にある者の義務を嚴守する女史の考は全く之と相ひ容れず、女史の才能は専ら主の御用の爲めに聖別されたのである。女史は、自分の精神的感化を他人に及ぼす場合には、大膽にして、少しも躊躇する所がなかつた。女史は、精神世界の事を、恰も物質世界の事を取り扱ふ様に、無造作に話した。公衆の前に立つ

て演説したり、個人に面談したり、通信したり、宗教の事や、讚美歌の小冊子、又は詩や、散文の書物を書いたり、出版したり、又外國傳道に興味を持つて、熱心に働いたりして、其の基督教的努力の生涯を送つたが、遂に其の度を過ぎて、身體を害ひ、精力を使ひ過ぎてしまつた。スチール女史はごに病身ではなかつたが、さりとて丈夫のたちではなく、時々肉體上の苦痛が、其の事業の妨げをなした。女史は僅かに、四十三で死んだ。其の歌は、皆で六十五程あつて、數冊の本に收められてゐる。其の中一書は、世に多く用ゐられてゐないが、立派な讚美歌集で、女史自ら其の編者の一人であつた。

『なんびか』第一編二百六十五の『主はいのちを あたへませり』(I gave my life for thee) は、女史の數ある讚美歌の中で、最も初期に屬する。日附は、一八五八年といふ娘時代で、前に述べた様な文學的生涯に、まだ足を踏み入れぬ先である。女史が此の歌を作り終つた時、餘り詰らなく思はれたので、火に投

げ込んだ。併し突然思ひ直して、直ぐ又それを拾ひ上げた。其の後間もなく、養育院に行つて、あるお媼さんに、それを讀んで聞かせた所が、其のお媼さんが非常に喜んだので、女史は此の歌を取つておく氣になつた。それが遂に、ハヴガルの作中、最も廣く用ゐられる歌の一つとなつた。此の歌は、獨逸美術館の一室に懸つてをる、有名な "Peace Home" といふ、荊棘の冠を戴いた、キリストの繪の上に出てゐる題句を見て、思ひ浮んだのだといふことである。其の題句の言葉は『われ汝の爲めに之をなせり、汝わが爲めに、何をなさんとするや』といふのである。此の繪はまた Zinzendorf 伯の經驗にも、同じ効果を與へた。シンジエンドルフ伯は、モラヴィアン派といふ、獨逸基督教中の敬虔派 (Pietists) の開祖である。此の歌の譜 Sacrifice は、米國の作曲家で、且つ讚美歌の作者なる Philip P. Bliss の作である。プリスの事は、本書第二十六篇に擧げてある。

『さんびか』第二編百四十六に譯載してある『かみのたまふ平和こそ』は、一八七八年に出來たので、それには Rev. J. Mountain の作つた曲に合はせてある。マウンテンは、英國に於ける、Keswickism の主なる代表者の一人である。此の主義は、主に Rev. Barclay Buxton や其の同志の力で、漸く日本に認められて來た。教會が一體となつて、主なるエホバに固く信頼し、主に榮を歸するのが、特に此の派の眼目とする所である。それに今も昔と異ならず、此の派の人々は、全き聖別といふ思想を高調する。ハヴァガール女史は、ケズウィックといふ名が、表現するに到つた、宗教的熱情に、心から同情してをつたであらう。これは英國の北部にある町の名であつて、此の町は、此等の人々が精神生活を益々深く進める目的で、宗教上の會合を開く集會場所である。

此の外『かへりきたるあたらしき』といふ歌が、『さんびか』第二編二百三十八に出てるが、これは新年の歌で、一八七三年に出來た。前のごと同じく、

女史一流の調子である。此の曲の作者は、今猶英國の大學町 Cambridge のオルガニストたり、又讚美歌の作曲家、將た聖樂集の編纂者として有名な Arthur Henry Mann (一八五〇—) である。

一八七二年に書いた『わがきみエスよ われををしへて』の中にも、亦同じやうに全き献身の精神や、神の爲めに一つの道具となつて働くといふ、全き服従の意味が通うてをる。それは、教役者の祈禱と題してある。そしてこれを歌ふ多くのキリスト教徒に、己の祈りであるといふ感を與へた。韻律は、翻譯の方では變つてゐて、七々調の Leyden の譜が用ゐてある。此の譜は、Louis Spohr の作つた者であるが、此のスポーアの事については、本書第二十、第二十一篇で述べたい。

第十一

『きたのはてなる こほりのやま』“From Greenland's icy mountains”

(さんびが第一編一五三・古今一九一・選歌集二五二)

監督 Reginald Heber の手になつた讚美歌は、五十七首許りあつて、何れも相當に廣く基督教會に用ゐられてゐるが、此の『きたのはてなる こほりのやま』は、其の一つである。これは、殊更に傳道事業の爲めに開かれた會合の歌にとて作つたので、爾後殆んど百年間、かゝる場合には常に用ゐられてゐる。此の歌のできたのは、一八一九年五月の或る土曜日の午後のこと、其の日ヒバーは、Wales の北部にある Wrexham という處の教會を牧してゐた舅を訪れた。翌日の日曜は、恰度外國傳道の日に當つて居つたので、牧師は何か特別な歌をと言ふ考から、其の集會に適合するやうな歌を作つて呉れまいかと頼ん

だ。婿なる彼は承諾して、此の歌の原文なる初めの三節を、僅々二十分の間に書き上げた。第四節は『思想を完結する爲め』後で加へた者である。斯くして出来上つた讚美歌が、永の年月の間、これといふ刪正も加へられずして、今日に至つたといふ事は、彼が詩歌、文學に秀でゝゐた確かな證據である。當時ヒバーは、既に十年乃至十二年ばかり英國々教會の僧職に就いてゐた。それから四年の後には、極東に於ける Calcutta の監督に任命される事となつた。彼はこのカルカタに、一八二三年から一八二六年までの短い歲月を送り、齡僅に四十三にして、忽焉此の世を去つた。彼の生れたのは一七八三年。其の品性誠に美しく、種々の任に當つて、職に忠に、人々に愛され、祈りの精神に満ちて、情深く、献身的熱情に富んだ人として普く知られてゐる。かの小説家 Thackeray は、其の著書の中に、彼を模範的僧侶、純然たる紳士、『魅力ある詩人、才氣、藝能、頓智、家柄、名譽、氣高き品性、財産を所有せる果報者』

と呼んでゐる。』彼は、己が教區なる Hodnet の自宅にあつても、牧師として愛慕され、區内に事件でも起ると、直ぐに相談を持ち掛けられ、又悶着の起つた時には忠告を與へ、なほ屢々己が危きをかへりみずして病床を見舞ひ、争ひの仲裁人、乏しき時の惠與者であつた。』

彼は、オックスフォードで大學教育を受け、その該博なる學識と、驚くべき詩的才能とによつて、其の名を現はし卒業後といつても、未だ三十歳にもなるかならないのに、Bampton の講師に任命せられた。こはかゝる若年者に取つては、光榮の至りといはなければならぬ。其上彼は、有名なる Quarterly Review (四季評論) に關係し、雜誌記者としても名を知られた。併し彼の主なる事業は、傳道であつて、これは彼が、十字架の宣傳者として、印度で爲し遂げた事業に於て、正に其の極點に達した。彼がかの地に於て、身に引き受けた責任の如何に難かつたかは、當時カルカッタの教區の非常に廣大なりし事實によつて

も推し量られる。其の區域中には、全印度及 Ceylon 島のみならず、Australia 全部を含んで居つたのである。彼は、此の重任に堪へ得たが、僅々三年の日月を閲したのみで死んだのは、惜んでもなほ餘りある事である。

ヒバーが、其の文學的活躍の一方面として、作歌を試みるに至つたのは、當時英國教會内に始まりつゝあつた、歌の變化に基因してゐた。變化とは、即ち今迄禮拜式に、詩篇の韻文譯の外、何も歌はなかつた習慣のすたれゆいた事である。彼はクリスチャン、イヤア中の節日々に應ずる歌を載せた讚美歌集を作らうと目論んだ。併し彼は、印度に於ける事業や、おのが早世の爲め、其の企圖を成就することが出来なかつた。保守主義の國教會當局者等は、詩篇讚詠を墨守して彼を妨げ、其の存命中、此の書の出版を許さなかつた。併し彼の死後間もなく、其の未亡人の請求により、遂に出版する事となつた。そしてそれが認可を経て、國教會の禮拜式に採用せられる様になつてから、一般讚美歌

中の主要部を占むるに至つた。それまでは詩篇と縁のない讚美歌を使用するのは、専らメソヂストとか、會衆派とか、其の他の非國教會に限られて居つた。併し此の種の歌の利益は、著しかつたので、國教徒の中でも、一層考の進んでゐた人達は、此の利益に與らんことを熱望した。『教會の讚美歌は、教會史上の花とも呼ばれよう。或る時代の讚美歌は、其の時代の精神生活から生れ出で、當時の最善の思想、感情を言ひ表す者である。而してヒバー監督の作つたかの偉大なる傳道用讚美歌は、此のよき實例であつて、十九世紀の初期に起つた英國に於ける布教運動の結實である。』

管に英國許りではなく、此の歌は、逸早く米國に渡り、Georgia州の Savannah に棲んでゐた、とある貴婦人の家庭に傳はつた。婦人は直ちに、此の歌に傳道心を開發せしむる力のある事を悟つたが、之に合はせる適當の譜がないので、當時サヴァンナに棲んでゐた或る年若な銀行員に、その曲を作つて呉れと頼ん

だ。青年は、努力奮勵、遂に見事に成功した。彼の有名な米國の説教家セオドル・カイラー博士 (Dr. Theodore Cuyler) は次の様に賞揚してゐる。『若しヒバー監督が、一傳道局を立てたとしても、此の歌は、それにもまして福音宣傳の爲には、必要で偉大な感化力を有つて居る』と。

此の青年作曲家とは、誰あらう、かのロウエル・メーソン (Lowell Mason) であつて、後、基督教禮拜式に用ゐる樂曲の作者及び編纂者として、米國の宗敎史上に其の名を轟かした人である。(第三篇参照)。彼がヒバーの歌の爲めに作つた曲は、Missionary Hymn と呼ぶもので、ヒバーの歌をうたふ國々では、まづ定まつてこれを用ゐる。獨り英國では、普通ヒバー自身の作で、曲名もビショップ・ヒバー (Bishop Heber) と呼ばれてゐる譜を用ゐる。『さんびか』と『古今』には代用譜が載つてゐる。

讚美歌第一編第三十五、古今第百十一の『せいなる せいなる せいなるか』

な』(Holy, Holy, Holy, Lord God Almighty)も、亦ヒバーの作つた讚美歌中、最も勝れた者の一つで、第七十二のロウエル・メーソン作、Zionの曲(一八三〇年作)に合はせて歌ふ『くしき星よ やみの夜に』(Brightest and best of the sons of the morning)、第四百二十四に出でてゐて、通常 Isaac Baker Woodbury 作 Siloamの曲に合はせて歌ふ子供の歌『かすみのたなびく はるの野べに』(By cool Siloam's shady hill) (一八二二年作)、第二百七十六の『あくまのくにを うちたひらぐる』(The Son of God goes forth to war) (一八二七年作)なども、之と同じである。最後の歌は、七拍子六行調で『さんびか』第一編に載つてゐる者の外、なほ一つの譯が出来て、『さんびか』第二編に出でてゐる。それは原文の韻律と同じなのである。此の歌を改譯したのは、Henry Stephen Cutler (一八二四—一九〇二)の作で、Vindexといふ立派な曲に合はせる爲めであつた。尙ほ此の改譯の結果として、教會は此の歌に擧げてある、使徒行傳の殉教者の物語の如く、凄絶な原文

を土臺とした日本語の讚美歌を二つ迄も有する様になつた。カトラーは、New York市 Wall街に立つ Trinity Episcopal Church (三一監督教會)のオルガニストであつた。此のヴァインデックスと云ふ曲は一八七二年の作である。も一人の作曲家ウツドベリー(一八一九—一八五八)は、暫しが程米國の音樂界に、其の名を喧傳せられた人で、其の作の或る者は、五十年餘も使用されて居つた。これは彼のごとくその初め、頼もしい教育も受けてゐなかつた者には、豫想外の事であつた。職人—鍛冶屋—の子と生れた彼は、幼い時に修養を積んだ譯でもないが、音樂家としてメーソン、Bradbury (第十六篇参照)及び其の他の米國の作曲家と等しく、一と角の位置を占めるに至つた。

讚美歌『くしき星よ』は、永い以前から世の信を失つてゐた占星術、即ち外見上星辰崇拜を辯護してゐるとの批難をうけた。併し何時しかこの批難の聲も去つて、今では主顯節(Epiphanay)に歌ふ讚美歌として、一般に認められ、

確かな地歩を占めてゐる。「聖なる せいなる せいなるかな」は、ヒバーの作つた讚美歌中、最も勝れた歌である許りでなく、今迄の讚美歌作者の手に成つた者で、これ程立派な歌はないと詩人 Tennyson は評してゐる。又其の意見に賛成する人も多い。が、此の歌が斯の如き評判を得るに至つたのは、一つには、之に合せて歌ふダイクス博士の Nicolson といふ、高尚なる譜の與つて力ある事、争ふ可らざる事實である。作曲家としてダイクス博士の位置は、讚美歌作者としてのヒバー監督のそれと殆んど同一であると言ひ得る。ヒバー監督の作が何れも相當に廣く用ゐられてゐるやうに、ダイクス博士の作曲も、またいづれもさうである。斯くも廣く世に歡迎せられるのは、其の音樂的方面に於ても、文學的方面に於ても、等しく最高の賞賛を受ける價値のある事を意味して居るので、また萬國の教會が、歌の作者並に作曲家のお蔭を大に蒙つてゐる事を示してゐる。歌を歡迎するのは之によりて受けし惠みを認め、之を尊重する事である。

第十二

『どかえのきみの 十字架を見れば』

“When I survey the wondrous Cross”

(さんびが第一編八四・古今七四)

既に前にも述べた如く、凡そ百年前までは、英國教會では、讚美歌を歌ふ事を公然と奨励せず、唯非國教派の教會のみ之を實行して居つた。宗教的儀式に、詩篇のみを歌ふ事が絶えたのは、今からざつと百年乃至二百年許り前のことで、此の改革に力ありし人としては、讚美歌作者の誰よりも、まづ Isaac Watts に指を屈せねばならぬ。

上記の傾向には、何等の反動も伴はなかつた。近代の人の歌ひ物として、近代的表現法の方が、舊約時代の表現法よりも適當であるといふ説は、今や疑ふ

餘地がない。

此の改革が、ワッツ博士の如き、拔群なる讚美歌作者によつて唱導されたのは、幸ひであつた。彼の手になつた歌は、六百首以上もあるが、今は多く歌はれなくなつた。併しこれは當然な事で、其の當時よりして、今は一層近代的となり、文藝の趣味も、一段の進歩を來して居る。かの詩篇を様々に焼き直した歌を、無理に使はせた、宗教上の約束がなくなつたのに、彼なり、又彼と同時代の作者の歌なりが、今なほ生き残つてをるといふのは、寧ろ不思議な位である。

マツヂスト教徒の手になつて、Wesleyの感化を受けてゐる者は別として、最近の讚美歌集中には、ワッツの作つた讚美歌が、最も多數を占めて、古今の他の讚美歌作者は、何れも其の數に於て、遙かに彼に及ばない。此の事實は、彼の歌の非常に價値のある事を最も明かに證據立てゝゐる。されば其の歌は、ま

た今までに出來た歌の最良の者の内に算へらるゝともいへる。彼が讚美歌を作るに至つたのは、當時行はれてゐた詩篇の譯に對して、自身なり當時の人々なりが、不満を抱いてゐたからであるが、特に彼の家族の屬する Southampton の獨立教會、即ち組合教會の役員や、或は彼の父に『もつと良い歌が出来るなら、作つて見たらどうだ』と勧められたのが、抑もの動機であつた。十八歳といふなほ少年の坂を越すか越さぬの若輩で、まだ傳道師の候補者として必要の學課も終つてない時分であつたが、彼は直ちに承諾した。そして出來たのが、次の主の日の夕の禮拜に歌うた歌であつた。歌は、人々の心になつて、次の日曜日には、も一つ作つて見よと頼まれた。斯くそれからそれと所望されて、遂に日曜日毎に一つの歌をよむのが、彼の習慣となつた。それが積り積つて、二百首にもなつたので、一と纏めにして一冊の本にした。其の後第二巻が出で、更に又第三巻が現はれたが、何れも何の教會にも受けがよく、爾後毎に版を

新にする必要があつた程で、それが十九世紀の餘程中葉まで繼續した。遙かに降つて、一八六四年に於てすら、十二月の内に六萬部足らず賣れた。併し世の風潮は、此の頃から變化を來し、趣きのかはつた作者の讚美歌集が現はれ初めた。其の時でも猶ワッツの歌は、斯る歌集中の大多數を占めて、基督教的知識及び徳義心を發達せしむる上に大いに力があつた。

ワッツの作つた讚美歌の多くは、要するに、當時存在した詩篇の翻譯物の修正、或は舊約の詩に新約の香をそへた譯し直しである。「ダビデ王が、基督教時代に生れて居つたら、必ず斯う書いたに違ひないと思はれるごとく、自分は書いた」と、彼は言うたさうだ。

本篇に選んだ讚美歌は、ワッツの歌の中で先づ第一と認められる作である。眞に傑出したもので、社會に廣大なる利益を與へて居る點から、有らゆる英語の讚美歌中の白眉と、普通見做されてゐる讚美歌が四つあるが、此の歌は、實

に其の一つである。他の三つとらふのは、キープルの『めさめよわがたまあゝひにちもなひ』(Awake, my soul, and with the sun) (巻二、第一編一・古今五)(本書第二篇参照)と、ウエスレーの『かみにはさかえ 地にはおたやか』(Hark! the herald angels sing) (巻二、第一編六〇・古今四)と、それから Toplady の『ちんせのいはよ わが身をかこめ』(Rock of Ages, cleft for me) (巻二、第一編二一五・古今二九三)(本書第十三篇参照)とである。讚美歌にして、斯る目録に載る權利の有無を定むる最も良い證據は、讚美歌の行はるゝところ、何處でも、又永い年月に渡つて——此の場合では全二世紀間——一般に之を用ゐるか否かといふ事實である。此の名作が、初めて世に現れたのは、一七〇七年の事である。此の歌の底に潜んでゐて、いつまでも此の歌をすてさせぬ特質は、二種あつて、簡單に言へば、『型』と『質』との二語に盡し得るのである。型は單純完璧であると同様に、質には遠慮なく塗抹の筆を振ふ『時』の手も及ばぬ程の深さと、豊さと

が無ければならぬ。型は心を引き、質は満足と與へる。如何なる見地よりするも、聖徒の立場よりも、批評家の立場よりも、其の眞價がいや増すやうにありたいものである。ワッツの歌の赫々たる光輝あるは、それが基督教的實驗に根ざして居るからである。活ける眼には、咒ひの十字架の理想を與へて之を屬まし、死に行く眼には、希望の十字架の幻影を與へて、之を慰めし事をも幾許なりしぞ。神の威光、権力、神聖に對するワッツの敬畏の念は、いかにも強く、其の歌は全體として、此の事實を證明してゐる。併し讚美歌としての價値は、そが批評家の胸をさへ動かす者、即ちジョン・ウエスレーの言葉を借りて言へば、『基督教徒を批評家たらしむるに非ず、批評家を基督教徒たらしむる』力の有無によつて定まるのである。故 Matthew Arnold は、純然たる評壇の代表者として見る事が出来よう。彼が最後の言葉の内には、此の歌の初めの句『さかえのきみの十字架を見れば』といふ文句があつた位で、彼は英語で書かれた讚美歌

で、之に匹敵する者はないと歎賞したさうである。彼の如き心はへの人には、譬へ眞理を示しても、若し其の文學的形式が斯く優秀莊重でなかつたなら、其の使命は全く失敗に歸したかも知れぬ。

英國の聖歌學に多少心得のある者なら、ワッツを思ひ出すと同時に、彼が作つた何か他の歌の初めの文句が思に浮んで來ない人はあるまい。詩篇第九十八篇を土臺とした『たみみなよろこべ 主はきませり』(Joy to the world! the Lord is come) (さんび、第一編五八・古今二五・選歌集六一) 曾ては食人種且つ頑冥なる敵されど今はキリストを知りその愛によつて、心一つに結ばれて居る南洋の土人が、大勢集まつて歌つた歌『日のてるかぎりは 主のみくにとなり』(Jesus shall reign where'er the sun) (さんび、第一編一五四・古今五五・選歌集一六一)、『みたまよくだりて あいのはのは』(Come, Holy Spirit, Heavenly Dove) (さんび、第一編二二〇・古今三三三・選歌集二二〇)、『かみはわがちから わがたかき檣』(God is the Re-

fuge of His saints) (さんび、第一編三四・古今二四五・選歌集二〇九)、又詩篇第九十篇から取つた『まがしより代々のわがたすけよ』(O God, our Help in ages past) (さんび、第一編四九・古今二四二・選歌集五一)及び『まよきみたみらの住むみくには』(There is a land of pure delight) (さんび、第一編三四六・古今三七五―兩書には別々に譯出されてゐる―選歌集三一〇)など、みな其の作である。其の中いづれを取つて見ても、此の靈に満ち、靈に導かれた工匠の磨きに掛けられて、光輝を放つ、聖なる天啓のダイヤモンドの玉のそれ／＼の面があらはれてゐるのである。

ワッツは時に『天人の博士』(Seraphic Doctor)と呼ばれる。此の名は、彼の如く學識ありて信念厚く、靈界及び其の時代の科學思想界に於て、生命の最善なる者を常に提供する人物には、特に適した者である。彼が學識の範圍は、甚だ多岐に亘り、論理學、哲學、天文學、宗教等に關し浩瀚なる書を著した。併し彼が今日の如き名譽を得、且つ人々の胸底深く其の領地を得たのは、主とし

て其の作つた讚美歌によるのである。七十四年にわたる彼の生涯の大部分は、病の床に過したので、此の境遇が、彼の如き詩人的神學者を造り出した。父は國教會に屬せず、非國教徒であるといふ廉で、牢屋に繋かれ、母は爲す所を知らずして、其の牢屋の石段に蹲つてをつた。その母の手に抱かれてをつた頃の彼は、弱々しい赤坊であつた。子供の時から少年時代と、年は進んで行つても、彼は一向壯健でなかつた。これ一つには、四歳の時に羅典語を學び初め、僅か七歳で一種の詩を作つたといふ傳説によつても、推測し得る如く『彼は實際若し事がなかつた』からであらう。廿四歳の時、當時組合教會の牧師たるに必要な神學の課程を終へ、任命されて直ちにロンドンの或る牧師職に就いたが、職責を果し得ない事が屢々あるので、暫くにして止めた。彼は生涯娶らず、其の晩年三十四五年は、有福にして奇特な友達の家に世話になつてゐた。友達は、彼を介抱し、慰め、彼等が心から價値を認めてゐた彼の有益なる人生を繼續せ

しむる爲めに、盡すのを樂みにしてゐた。彼等の同情がなかつたら、彼の生涯はあれ程永く續かなかつたであらう。此の尊い仁慈の徳に對して、基督教會は深く感謝しなければなるまい。曾て或る牧師が、献金の濟んだ後で、此の『さかえのきみの 十字架を見れば』の歌を擧げ、其の第三節の句を摘出して『苟も此の様な意味の言葉を口外する者が、今集つた位の少額の献金をすることは、其の意を得ぬ』と話したといふ面白い逸話がある。

此の歌の日本譯は、原文の永い調子八拍子四行調ではなく、もつと日本人の趣味習慣にしつくり合つた七拍子六行調である。此の譜の主なるものは、ゲッセマ子といつて、Richard Redhead (一八二〇—一九〇〇) の作である。レッドヘッドは、英國人でオルガニスト、作曲家、又音楽書編纂者であつた。彼はかのオックスフォード運動、即ち小冊子派運動(第四及第五篇参照)、又時に羅馬教復興運動と呼ばれてゐる騒ぎの起つた時、音楽の方面に於て、多少之に關係したので、

名高くなつた人である。其の作は、主として嚴しい教會主義、或は儀式主義の型に填つてゐる、此の譜は、レッドヘッドの編纂した讚美歌集の第七十六番に載つてゐる。それは又『Eoplady of the Rock of Ages』(Rock of Ages) (巻二の第一編二二五)の歌にもついてゐる。

ワッツの讚美歌の他の譜の中には、作曲家 John Hatton が十七世紀の末ごろ住居してゐた、とある英國の町の名に因んだ、Duke Street の曲(巻二の第一編二三四)、長老統一合同教會の牧師をしてゐて、特に聖歌の教師、作曲家及び編纂者として働いた Ralph Harrison の作つた Warrington (巻二の第一編二五四)、及び William Croft (一六七八—一七三三)、一七〇八年の作 St. Anne (巻二の第一編七九) と呼ぶ、古い曲なぞがある。クロフトは Windsor の帝室會堂の少年合唱隊の一員であつた。成人した後、その會堂及び Westminster 寺院のオルガニストとなり、死して其の寺院に葬られる事となつた。此は俊れた人々の外受け得ざる光

榮なのである。セント、アンの曲は、今は一般に古い大作「昔より代々のわがたすけよ」に合はせて歌はれる。天國の事を歌つた讃美歌の中で、最も勝れた者の一つなる『きよきみたまらの住むみくには』は、讃美歌では George Frederick Root (一八二〇—一八九五) 作 Varina の曲に合はせてある。ルートは『米國の作曲家中、最も著名な人』で、聖曲も作れば、普通の曲も作り、且つ各種の音楽學校及び音楽協會の設立者である。ルートの音楽的生涯は、ボストンに於けるロウエル・メイスンの門下生たるに始まり、彼が編纂した、許多の歌集を出版したシカゴの音楽出版會社の長たるに終つた。右の歌集は、半世紀以前までは夥しい評判であつた。

『たみみなよろこべ』の譜 Winchester Old は、一五九二年、ロンドンに本屋をしてゐた Thomas Este といふ人が出版した Psalter (詩篇) といふ歌集に初めて出てゐる。それらの譜に名をつけたのは、英國でこの歌集が初めてゐる。近頃ソツの歌に合はせて歌ふのは、大抵五十七番の Antioch の曲で、之には Handel なる大名が結び附いてゐる。音楽史上に於ける此の大人物に關しては、Dodridge 篇第二十四に委しく述べる事にする。

第十三

『ちこそはいはよ わがみをかこめ』“Rock of Ages, cleft for me”

(さんび、第一編二一五・古今二九三・選歌集一八一)

此の歌は、基督教の他に比類なき事を歌つた者で、今まで書かれた中で、最も信徒に愛でられた作と、多くの人に言はれてゐる。作者 Toplady は、此の歌によつて幾百年の間、数百万の人々の心髄にはひつてをる。他のあらゆる作者、Charles Wesley すら、是には一步を譲らなければならない。ウエスレーが千首にもあまる歌を作り、世を益したのに反し、トブレデーは唯此の一つの努力によつて、斯くも名高くなつたのである。さらば此の歌が英語となり、翻譯でなり、他のいづれの韻文(聖歌或は他の歌)にも勝つて歌はれてをる事は、明白であらう。彼の名は近代の聖歌集には、やつと三つか四つしか出てゐない。讚美

歌には『ちこそはいはよ』の外第一編三二七、『なやみとやまひの』をかすときも』(When languor and disease invade) がある許りである。これは他に此の人の作がなかつたからではない。まだ澤山あつたが、基督教信徒の信仰と禮拜とを目的とする書き物として、多くは内容が貧弱で、且つ餘り論争めいてゐるからである。

★ウエスレー、モンテレー、トブレデー Augustus Montague Toplady (一七四〇—一七七八) は、英國の陸軍少佐の子であつた。英本國で生れたのだが、教育は Ireland の都 Dublin の Trinity College で受

けた。彼は英國々教の按手禮をうけ、十四年間其の教會で働き、後ロンドンでフランス、カルヴィン派(French Calvinists)の獨立教會の教師になつた。彼は最も過激で、交戦的なカルヴィン教派の代表者であつた。教義上の問題に就て、彼は他の人々、殊にメソヂスト派の建設者ジョン・ウエスレーとは、意見を異にして激烈な調子で之を難じた。これはウエスレーもひとしく責めを負はなければ

ならぬ點であらうが、百年以上もたつた今日では、最早人々は此の様な事を咎めない。此の兩人の基督教會に盡した功績は、之を償ひ得て餘りがあるのである。『ちとせのいはよ』の起源は、判明して居ない。一七七六年此の歌が始めて印刷せられた時よりも、ずっと前に出来たのだらうといふ説を立てる人もあるが、餘り信を置けない。これはトブレデーが、主筆をして居つた福音雜誌(Gospel Magazine)の一七七六年三月號に載つてゐる。奇妙な話であるが、それにトブレデー自身の筆になつた論説があつて、人間が一生涯に犯す罪の數を想像した計算が出てゐた。罪は一日一時間、或ひは一秒間に一つ起る者と假定した者で、一秒間を單位として見れば一人の人が二十歳までには、六億三千万の罪を犯す事になり、七十歳には二十億以上になるとの事である。彼は此の計算の後に『此の數へきれない人間の罪の負債が、如何して返されようか』と問ひ、『否、決して』といふ明白な語で答へてゐる。而して神の絶對なる恵も、此

の大きいなる負債をゆるし、之を消してしまふ事の不可能を説いてゐる。論説の終に、罪の計算が行き着くカルヴィンの結論として、『ちとせのいはなる』の歌四節が載つてゐる。此の論鋒がウエスレーの全く聖とせらるゝこの教義に向けられてゐるのを見ると、歌の作者がトブレデーである事は疑もない。此の歌は『世の最も神聖なる信者が、活けるをり、及び死なんとするときの祈』と題してあるが、これもトブレデーのやうな人の附けさうな詞書である。詩といふ點から、又は文學の上から、嚴密に評すれば、此の歌は實に價値乏しく『不適當なる比喩の集り』と言はれもしようが、しかも種類の異なる基督教徒の間に、教育なき者のみならず、教育ある人々の心にも、永く且つ深く刻み込まれたといふ事は、先づ人の不思議に思ふ所である。歌の句はヴィクトリア女王(Queen Victoria)の御配偶 Prince Consort の最後の言葉にも現れてゐたといふ。併しながら、此の歌が如何に遺憾なく人間の心の奥の要求を言ひ現はしてゐ

るかい解れば、此の疑念も直ちに氷解するであらう。「此の歌は、先づ良心の警戒を興へ、罪の幻影に怖ぢ恐れてゐる心を勵まし、大地の溶けゆく中に、贖はれたる靈魂を穩かに残して去る。」罪人が救主に對して、絶對なる信頼を置く點に於いて、此の歌は讚美歌の中で、丁度詩篇に於ける第五十一篇と同じ位置を占めてゐる。ウエスレーの名を最も偉大なる者と見做してゐる人達にも、此の歌が今まで非常にもてはやされ、又これからもさうであらうと思はれるのは、前に引いた句にあるやうな特性が、歌に存してゐるからである。此のカルヴィン派の偉大なる代表者トブレデーは、死後彼自身の望によつて、メンヂェスト派と早くから密接の關係のあつた、ロンドンの Tottenham Court Road の教會に葬むられた。此の教會は、傳道師 Whitfield が建てたので、ホイットフィールドが死んだ時、ジョン・ウエスレーが其の葬式の説教をした場所である。これはトブレデーの敬神の念の深かつたといふ事と、神學上の論戰などの一時のもので

ある事を證明する、美しき事實である。將來に於いて、今まで通りにチャールス・ウエスレーの『わがたましひを』（第十四篇参照）と、トブレデーの『ちとせのいはよ』とが、『二つのたましひの歌』として、共に歌はれ共に働いて、あらゆる階級の基督教信徒を一致させ、而してカルヴィン派とアルミニアン派との間に永く横はつて居つた溝も、一人の主に仕ふる事によつて、全く埋められるであらう。例へ各々教義は異つてゐても、根本の信仰と禮拜とは一つであるから、それが歌となり祈りとなつて現はれて、又同じ結果を人類の日常生活に及ぼすであらう。

トブレデーは、僅か三十八歳で死んだ。生前はワッツの如く虚弱なたちであつたが、しかし何時も古の豫言者の如き信仰と、燃ゆるばかりの熱誠をもつて居つた。彼が多少宗教的偏見を有して居つた嫌ひはあつても、此の事は認めなければならぬ。死に瀕した時、彼は側の人々に向つて「神の慰めは、此の

身に満ち溢れて、此の上聊かも望む所はない。自分の祈は、皆稱讚に變つてしまつた』と言つた。醫者が少しい、方だと言つた時も、彼は『否私は、もう此の世には棲むまい。神は私のたましひに榮を現はして下すつた。何んな人間でも、神の榮を見て後、生きながらへてゐる事は出来ない』と答へた。

米國では、『ちとせのいはよ』を普通、作者の名に因むトブレデーといふ『さんびか』及び『古今』の第二の譜で歌つてゐる。此の譜は、米國で一八三〇年に出來た者である。作曲者は Thomas Hastings 博士である。博士は前世紀の頃の人で、讚美歌の作者及作曲家、又編纂者として名高く、米國の音楽界の發展に少なからず貢献した人物である(第四十二篇参照)。此の他英國の會衆によく歌はれるゲッセマ子といふ、レッドヘットの曲もあるが、それは本書第十二篇『さかえの君の十字架をみれば』を論じた所に出てゐるから、参照して戴きたい。

第十四

『わがたましひを あいするエスト』“Jesus, Lover of my soul”

(さんびか第一編二七・四四五・古今三一六・選歌集一八三)

Toplady が一首の大作によつて名を擧げたとするなら、Charles Wesley は數百乃至數千首の歌によつて、その名を得た者といへよう。それにたゞ歌の數が多いいふ許ではない。その中には、非常に世を益した者が澤山あつた。キリスト教社界で用ゐて來た讚美歌を見れば、この事がよく分る。英語の讚美歌集中、ワッツを除いては、此の人の作が、先づ一番多い。ウエスレーとワッツ二人よせると、他の讚美歌作者を全體合はせた程の、作の質もあれば、價値もある。二人だけでいふと、ワッツの作の方がむらが少ない。ウエスレーのは數が多過ぎる。高い標準に合はない様なのが時々ある。何しろ原稿で十三卷、六千

餘首といふのである。これに對してワッツのは數百首である。

ウエスレーの如く、教養あり、識見ある人物が、何故、かやうに多作したのかといふに、多分これは、時代特殊の事情によつたのであらう。彼は、今から百五十年前、英國に起り、それから全世界に波及した『驚くべき宗教勃興』の中心に立つた人物である。ちやうど、それより二世紀前に起つた宗教改革の進歩が、ルーテル及び他の人々の歌に負ふ所、大なりし如く、メソヂストの神學を、歌に讀み込む必要があつた。詩となれば聽く人が痛切に感ずるのである。ウエスレー兄弟は、時代の要求に應じて、神が下し給ひし人物である。兄なるジョンは、主として福音の新しい方面を説く説教者、弟なるチャーレスは、これを歌によむ務を帯びてをつた。併しこの區別は、さう劃然とした者ではなく、時に兄も歌の筆をとり、弟も説教した。しかし先づ大體の區別はかうである。總じて、チャーレスの歌は、キリスト教神學の全體にわたつてをる。聖書の

主なる句で、彼の歌の中のごとくに、詠み込まれてないのは、ないといつてよい位である。今日用ゐられない歌は、後世用ゐられようとしたのではない。當代の人を勵まし、且つ教へるのにあつたので、その目的は既に達せられたのである。これは詩の形を取つた説教の如きもので、塵にまみれた説教集にも、これと同じ運命に遭ふのが澤山あつて、過去の記念として、多少感興を惹く者である。

神と人の靈とが、おの／＼直接に相結びつくことの必要を力説する所、そこがウエスレーの歌の特徴である。かゝる説の人は神に狎れる傾向がある。これはウエスレーが極く親しくしてゐた Moravian 教徒の中にも、往々見る所であるが、ウエスレーはそれを避けた。かゝる境にあつて、ウエスレーの調子が尊嚴を失はなかつたのは、かのアングリカン教會の中に生れ、且つ育てられたからであらう。彼の父も、祖父も、又曾祖父も皆國教會の教職であり、自分もさ

うであつた。そして彼は、兄ジョンと違つて教職を罷めなかつた。又メソヂス
ト教徒としても、教職を罷むべきものだと、信じなかつた。その母は有名な非
國教會の牧師の娘であつたが、幼い時、自ら進んで、國教會に入つた人であ
る。ウエスレー家に傳つた福音的熱情は、此の善良なる婦人の生涯が、よく説
明してゐる。

チャールズが、その四十餘年の公生涯の間に作つた歌の中で、一番キリスト
教信徒に愛誦せられてゐるのは、この篇で述べる歌である。これは明かに、心
勞や、試煉の境を過ぎ來し人々に對する歌で、またさればこそ、無数の人の力
とも、慰めともなつたのである。出來たのは一七三九年、作者が三十歳の時で
あつた。アメリカへ渡り、英國の植民地で今の南ジョージヤといふあたりの州
の知事の書記官となつたが、志を得ず、職を去り、荒い風波を冒して國へ歸つ
たのは、ついその一年程前、當時の辛い經驗はまだ記憶に新しかつた。歌の中

に海の想の出てゐるのは、多分この爲であらう。この歌の思想のこころや、表現
の仕方に就いて、種々な傳説が起つた。併し何れも確かな者でないので、茲には
繰り返すまい。たゞ歌のしめす如く、作者が全くキリストに信頼してをつた事、
及び己れと等しく、此の人生の荒海を渡る船人に、眞に同情して居つた事が分
ればよいのである。この歌が當時確かに、格外に持てはやされたといふ例は澤
山あるが、今その一つを擧げて見よう。米國で有名な説教家Henry Ward Beech-
erは、地上に君臨した諸の王の譽を得んよりは、この一首の讚美歌の作者で
ありたい、と言つたさうだ。王は死に、そして唯歴史上の事件の區切を附ける
丈で、皆忘れられてしまふ。『併し彼の歌は、終りのラッパの響くまで、歌はる
るであらう』。

『わがたましひを あいするエズよ』は、言ふまでもなく、ウエスレーの數
ある讚美歌の中で、最も優れた者である。而もこれが次に擧げる様な、何れも

世の中に知れ渡つてをる立派な讃美歌と比較しての上であるのだから、一層意味が深い。次に挙げる歌は『さんびか』には皆載つてゐる。『古今聖歌集』にも大概出てゐる。これらの歌は讃美歌中最も廣く歌はれてゐる者で、その冒頭の句は、英國では勿論のこと、今では日本でも、殆んど常套語にならんとしてゐる。

『夜をもるつきに 今やかはりて』“Christ whose glory fills the skies”

(さんびか第一編三、朝の歌、一七四〇年の作)

『エスのみさかえと みめぐみとを』“O for a thousand tongues to sing”

(さんびか第一編二九・古今二九二・選歌集八六)

これはジョン・ウエスレーが原文から選んで、メソヂスト派で用ゐる有らゆる讃美歌集の初めに出した者である。原文は十八節より成り、一七三八年の作で、悔改の記念日なぞに歌ふ。全原作の始めの行は、

『榮光と愛と稱讚とは神にあれ』“Glory to God and praise and love”といふ句

である。この歌は、モラヴィアン派の Peter Bohler の言葉から、作者がこれを作る心になつたのだといふ。ウエスレーが、その悔改の實驗をのべて『併し此の事は話さない方が良しと思ふ』といつた時、ビューレルは『いや、よし百千の舌があつても、私ならそれを残らず使つて、救主を讃美する』と答へたといふ。

『かみにはさかえ 地にはおだやか』“Hark, the herald angels sing”

(さんびか第一編六〇・古今四四・選歌集六七)

『みよくものりて あがなひぬしだ』“Lo, He comes with clouds descending”

(さんびか第一編一〇六・古今三五・選歌集一一五)

此の歌は一七五〇年 John Cennick (一七一八—一七五五) の作つたのを、一七五八年に至つて、ウエスレーが最後の修正を加へた者で、この修正した形が、その後、到る處の基督教社會でもてはやされてをる。されば是は兩人の共作と見

るべきであらう。

『あめなるよろこび こよなきあいを』“Love Divine, all loves excelling”

(さんび、第一編二九四・古今三四六・選歌集二二〇)(一七四年の作)

『よろこばしき こぞひびかせ』“Blow ye the trumpet, blow”

(さんび、第一編一六八・選歌集六三)

『われはかたく こゝろに認む』“A charge to keep I have”

(さんび、第一編二六八・古今三〇二・選歌集二六三)

『あめつちにあまる 神の御名を』“O for a heart to praise my God”

(さんび、第一編二四七・選歌集二四八)

これは詩篇第五十一篇十節に因んだ者である。

まだ他にもあるが、皆挙げる餘裕がない。

『真に立派な歌は、彗星のやうな者で、滅多に現はれない』といふ説は、チャ

ーレス・ウエスレーの作によつて覆されてしまふ。何の點から見ても實際立派

な歌が、續々かれの手になつた。この歌の流はかれが死んで始めてごまつたのである。ウエスレーの歌が何日までも廢れないのであるのは、或る人が評した通り、歌が『非常に華やかで陽氣』(“All bright and sunny”)であり且つ『信念の高きを知りて、疑惑の深きを知らざる』人の作だからであらう。詩人クウバーは、その理想を

あがなひたまひし愛こそ わが歌なりけれ

げにわが死なん日までの うたごぞならん

“Redeeming love has been my theme

“And shall be till I die”

と歌つてゐるが、これはウエスレーが實驗した理想であつた。彼は地上八十年の生涯の最後まで、キリストの『贖ひ給ひし愛』をば、文字通り歌つた。彼の死んだのは一七八八年である。彼は一七〇八年、Edworthの教師館で初めて日

の光を仰いだ。彼はあの著名なるウエスレー家の第十八子であつた。

『わがたましひを あいするエスよ』は、色々の場合に役に立つたもので、宗教上、又歴史上、特に興味のある歌である。かの福音士 D. H. Moody の遺骸が、まさに其の永遠の臥床に置かれんとする時、歌はれたのも此の歌である。曾てアメリカ蒸気船の甲板に、船客の催しの音楽の演奏會のあつた時、此の歌を上手に獨唱した人があつた。その聲を聞いて不審に思つた一船客、獨唱者に近付いて話をして見ると、何ぞ計らん、此の二人は、近頃終結になつた米國の南北戦争に、敵、味方となつて戦つた者であつた。月の明るい夜、ある地點に北軍が野營をした時、獨唱者は外で歩哨の任に當つて居つた。折りしも忍び近寄つた南軍の一小隊中の一兵士は野營攻撃の手始めに、彼の歩哨の心臓目かけて火蓋を切らんとした。その刹那歩哨は此の讚美歌を歌ひ出した。彼は躊躇した。そして『われにはほかの かくれがあらず、云々』(Cover my defenceless head

With the shadow of Thy wing) と歌ふのを聞くにおよび、手は自然に下り、どうしても發砲するに忍びなかつた。この南軍の歩哨兵といふのは勿論、今獨唱者に話しかけた一船客である。前の北軍の兵士は、かの時の光景をよく覚えてゐた。かの夜、獨りわびしく歩哨を張つてをると身に迫る危険のこと、家のこと、友のことなど頻りに思ひ出だされて堪へ難い。沈む心を引き立てようと、小さい聲で歌を歌ふと、たちまち、平和と確信の念が大水の様に、身に湧き起るのを覺えた。小さいと思つたあの聲も、敵に聞えたのであつた。『併し歌に合まれてゐる我が心の祈りが、答へられたとは少しも知らなかつた』と、彼は言うた。

ウエスレーの作の中で、一番勝れた此の歌に合せて歌ふ曲のことを一言しよう。ダイクス博士(第四篇参照)の作 Hollingside は、イギリスの基督教信者や、外の國々の多くの人が好んで歌ふ曲、Martyn は『さんびか』と『古今聖歌集』

に代譜となつて載つてゐる。これはアメリカで出来た者で、餘程古い。ホリン
グサイドは、一八六一年、マアチンは一八三四年の作である。マアチンの作者
は Simeon Butler Marsh (一七九八—一八七五) といふ米人である。さんびか第四
百四十五番に、この外、代用譜が四つ出てゐるが、その中、Faith ʼs Refuge I ʼs
は、同じくアメリカ人の作である。レフュージ一は、會衆で歌ふのよりは、四
部合唱に適してゐる。但しその末尾の所だけは別である。四部合唱にすると、
所謂『諸音の細流が、歌の流れに注ぎ込む』趣きがある。Franz Abt (一八一九—
一八八五) の作、レフュージ二はドイツで出来た者で、初めは、『家路に燕の飛び
行く時』(When the swallows homeward fly) といふ獨唱用の名高い俗謡にあつ
た者、今尚ほ用ゐられてゐる。Abt は Leipzig で、合奏や、合唱隊の指揮者
をしてをつた。作曲の數、三千餘、一時は非常にはやつた。Sawyer の曲は此等
の中で一番新しい。これは Mac Nair 夫人の作、一九〇三年初めて、日本の『や

んびか』で公にせられた者だ。

『かみにはさかえ 地にはおだやか』の曲 Mendelssohn は『さんびか』第一
編第五十七の、これもウエスレーの歌なる『見よやわが主のめぐみのひか
り』(See how great a name aspires) にも合せて出てゐる。この曲の名を聞くが、
猶太民族の中に生れた最大音楽家、哲學博士 Jacob Ludwig Felix Mendelssohn
Bartholdy (一八〇九—一八四七) を思ひ出す。

メンデルゾーンは、猶太系の人であつた。父はベルリンの銀行員で猶太人であつたが、後基督教に轉じ、その子も父の後を續いで基督教を信じた。メンデルゾーンは、一家の者がハンブルグの町に假住居してをつた時生れた。メンデルゾーンといふのが姓であつたのだが、この音楽家の父の代に、メンデルン・バートルデーとしたのである。彼は子供の時から兩親の樂しみの種、同時に心配の種であつた。音楽が好きだといふことが分つてからは、ベルリンにゐ

た時も、パリに來た時も、又ベルリンに歸つた後も、手の届くだけ良い先生の教を受けさせて貰つた。修業空しからず、演奏も（ことにピアノ）、作曲も殊に勝れ、十二歳になるやならぬに、その集を出版する事となり、それが後に四十四巻に達した。作は多様で、シンフォニー、カンタタス、オレートリオ（殊にエリヤ・Elijah）、歌劇、序樂、や、軽い男女聲の曲、聖曲及び普通の曲、それに名高い無言歌（Lieder ohne Worte “Songs without words”）なつもある。彼は自ら創立したライプシツク音樂堂の指揮者となり、そこに名あるオーケストラを集めえたのみならず、歐洲大陸や、英國の大音樂會の指揮者として、しばしば現れた。彼の交友は、當時の主なる人物で、王侯より、文藝界の明星に及んでゐる。かのゲーテ（Goethe）も親友なり、保護者なりであつた。彼の學位は、ライプシツクの大學から名譽をあらはす爲に贈つたのである。彼は年四十歳にも達せずして、一八四七年にこの世を去つた。彼は、獨、佛、英を通じ

て敬愛をうけた。その占めた地位は之を前にしては、まづハンデルあるのみで、後にしては、記憶のうすれゆく日は知らず、いまだに彼に及ぶものなきが如きまでである。

『さんびか』に收めたあの曲は、彼の Fest Gesang の一部から一八五五年にとつたものである。原作は、印刷術の發明を記念するお祝が、一八四〇年ライプシツクにあつた時の曲である。

第十五

『つみの淵に おちりて』“Rescue the perishing, care for the dying”

(おんびり第一編一八三・選歌集一七四)

Van Alstyne 夫人(通稱 Fanny Crosby)の名と作とを理解のある筆で紹介しては、此の讚美歌物語集の完成は期せられない。夫人は一九一五年二月この世を去つた。九十歳を超えて尙才筆の衰へを見せなかつた女史が、一世紀に亘る生涯を通じて、作は夥しく、恐らく、八千篇を下るまい。約十年前米國のビグロー、メイン出版會社(Biglow & Main Co.)のみの手にも、五千五百篇を送つた。斯く數多い中には、勢ひ秀逸と認められる者は少なく、従つて今後歴代の讚美歌として、數へられるに足るものがあらうかと、危ぶまれもする。併し此等の作中、現今の基督教信徒にとつて、優渥な天恩を仰ぐ、正しき媒介と

なつたもの、多いのも、これまた明白である。作者の歌の多くが、さる方面に成功したのは、譜の宜しきを得たのと、MoodyやSankeyなどの、説教もし、歌ひもした傳道者の事跡と、聯想されるからである。批評家が判定するのも、尤もながら、キリスト教の書籍類で、一億部も賣れ行いたと云ふのから見ても、些々たるものでない。且作者が幼少の頃より失明者であつたといふ事も、此の稿を顯著ならしめるに足る。『女史の苦難』と、人の呼んだものを指して、夫人自らは斯う言つて居る。『暗黒は外界の事物に陰影を投げえよう。然し如何程暗澹たる黒雲も、眞の靈より希望の光を遮り得る者でない。神は測り知られない御情を以て、私を聖別して、今の業を興へて下された。私は信じて居ます』と。失明の因は、風邪の爲、眼に焔衝を起したに過ぎないのを、醫師に誤診されたが爲であつた。

ファニー・クロスビー女史の自傳を讀む人は、それが極度の喜悅に彩られ

た、一生であるのを見るであらう。女史の八十五回の誕辰に當つて、前大統領 Cleveland の書いた手紙の一節を引けば、彼女の生涯は、又『人道を鼓吹し、神の善と恵とを、愛好せよとの、私心なき努力の、不斷の繼續』であつた。人道の爲とあるは、まづ紐育市の盲學校にあつて自己と同じき盲人等の爲盡した一事である。作者も、初めはそこに學び、後教師となつた。千八百五十八年同僚の盲人と結婚するに及んで、職を退いた。それからの五十餘年こそは、より大いな、より廣い奉仕に充ちた、効果の著しい時期であつた。あらゆる類の、凡ての状態の人々に、又アメリカの國境を超えて、國語の如何を問はず、彼女の歌のうたはる、限りの國土に、貢獻しえたのである。盲人と強記とを合せ思ふが人の常であるが、ヴァン・アルスタイン夫人の場合、例外と迄いはるべきである。或時、これの題で讚美歌を書いて呉れる様にとて、約五十の題目を興へられて、出來た四十篇の一つでも、完了以前

に、寫字生の手で寫し止められはしなかつた。又女史は頗る速筆家で、かの好んで歌はれる、『御手に抱かれ 安らかに』(Safe in the arms of Jesus) などは、僅か廿分の作である。此の原文のは、廣く人の知る所であるが、『さんびか』にも『古今聖歌集』にも『選歌集』にもはひつてゐない。聖歌界に於ける作者の位置を示すものとして、僅か一、二の作を擧げる事は難かしい。殊に此の作者の場合にはさうである。然し、『さんびか』第一編の十四首と、第二編中の十五首の中より、特に此の『つみの淵に』を選出して稿を綴つたのは、彼女のすべての歌の特徴である。純朴と熱誠とを素とした型の、代表的のものであること、今迄論じ來つた種々の歌に比べて、獨特な性格があるからで、路加傳十四章廿三節を歌にした此の小福音音程、必須であり、役に立つたものは、古今の聖歌を通じて、餘りあるまいと思ふ。廣い靈性上の意義に解せられ、適用せられて、教會の祈禱會に歌はれる許りでなく、或は救世軍の陣

營に、進軍中に、宗教學校の禮拜堂に、社會救濟團の集會に、又は王女會、禁酒會など、罪の淵に陥つた者を救ふを目的とする、諸般の改善會の集會に用ゐられてゐる。

此の聖歌は、千八百六十五年、紐育の裏街ボウワリーのある傳道所に催された集會のすぐ後で書かれたので、その時の感が、靈感となつて歌はれたのである。該市の傳道事業の目當である、苦しめる亡びゆく人々に關するいろいろな事を、靈眼で認めた女史は、同情に溢れた心を此の歌に注ぎ入れた。「私が危ふく墮落しようとして居た時、神の恵に依つて、此の歌のお蔭で救はれました」と、此の種の集會で告白した者があつた。折しも夫人が居合はせたので、其の一人と聴衆とに紹介された時の、人々の感慨はそんなであつたらう。又一度は、ある男が酔歩蹠蹠として、ボウワリー集會所にはひつて來た。女史の此の歌が歌はれた後、ある退職軍人が起つて感話をした。其の頃解決のついた許

りの南北戦争に参加した折の經驗談に及んだ時、自分は、何聯隊何部隊の所屬であつたといふ事を、何の氣もなしに口にした。會が散じた時、さきの男は、此の人の許に行つて訊いた。「只今お話の戦争の時、あなたの隊長は、誰でしたか」「何某さんです」といふと、「さあ實は私がそれなのです。あの時あなたの隊長の長であつた者が、酒の爲斯うした境涯に陥込みました。昔の好誼で救つて下さるまいか」といつた。斯うしてこの會と此の讚美歌とが齎したものは、奮きを脱した生活と、生き返つた魂と、亡びにおちた一將校の復職とで、さらに基督の一兵卒として感化に富んだ生涯の門口に、彼を立たしめた。

「救をうけしは、御恵なりき」(さんび第一編一八〇)の歌にも、之に類した記事が往々ある。不圖、此の詞を耳にし、其の曲を聴いて、不幸にも路を踏み迷つて居る者が、呼び戻された例が、幾度かあつた。これは一八九四年の夏、Northfield のムーデー氏の傳道會の折、朗誦されたのが始めて、後間もなく、

英國で出版される、月刊の「宗教雑誌」に掲載されてより、傳道の使命を、廣く世界に果す様になつた。今では福音唱歌集の何れにも載つて居る。

『エスよ此の身を ゆかせたまへ』(Jesus, keep me near the Cross) (さんびか 第一編 八二) はヴァン・アルスタイン夫人の抒情詩として、永久に傳へらるゝものゝ一つであらう。百六十七番の『エスキミ、エスキミ』も亦さうである。神と神の恵より離れ去つた男女の心を、此等の歌が捉へた例は、枚舉に暇がない。

女史の此等少數の歌は、音楽者 William Howard Doane の作譜で歌はれて居る。氏は二十五年程前、あの名ある亞米利加音楽隊の訓練者で、又廣く人の知る、受けのよい聖歌の譜の作者である。一八三一年の生れで、今尚 Ohio 州 Cincinnati に住んで居る。

『さんびか』第一編三百一の、『あなうれし、わがみも』(Blessed assurance) は一八七三年、作曲者 Phoebe Palmer Knapp 夫人 (一八三九—一九〇八) が彈奏した

のをきいて、クロスビー女史が、直ちに詞の解釋を附したもので、今では歌詞と譜とは、離れ難い者となつた。日本語の譯も同様で、これは一日紐育市の、ヴァン・アルスタイン夫人の家で大きなバイブ、オルガンに合せて、鶴飼猛氏が、失明詩人の前に歌つた事がある。其の時の譜も、ナップ夫人の彈奏したそれであつた。

此の歌は、又英國の兵士間の合言葉の一種ともなつた。基督敎團を組織してゐる兵士らが、遭ふ折に、一人が四百六十四といふと、『もう六つ』と答へる。これは『神つねにともなれ』(さんびか 第三九二) の挨拶に『あなうれしわが身も主のものとなりけり』と、答へる意で、兵士等の禮拜用讚美歌集にある、番號をいふのである。是は讚美歌の珍しい用法であるが、讚美歌が、これほど人々の日常生活にはひつて來たかを示す著しい例である。

Ira D. Sankey (一八四〇—一九〇八) の名は、『さんびか』殊にその第二編にあ

る、ヴァン・アルスタイン夫人の歌と、一再ならず結びつけられてゐる。サンキーは、十九世紀の、歌をよくする傳道師らの中、最もよく知られた人で、D. H. Moody と提携し、英米にかけて、信仰復興運動を起し、ムーデー共々其の働に効果を収めえた所以は、この歌ふ才に長けてゐたが爲である。彼の獨唱は、其の力を遠近に及ぼし、ついで『聖歌と獨唱』(Sacred Songs and Solos)の一書を出だすに至つた。此の歌集は、かゝる類の出版物に比を見ない程の賣行きであつた。氏は晩年に、視力甚しく衰へ、最後の數年は、全く失明者で了つた。

第十六

『ごちをなきわれを 血をもてあがなひ』“Just as I am, without one plea”

(さんびの第二編二二一・古今三〇八・選歌集一七七)

有用なる讚美歌であるか、ないかは、基督教界數ある宗派の讚美歌集に、その歌の採用されてゐる範圍の廣狭によつても、それと知る事が出来るか。之を右の歌に當てはめて言へば、過去半世紀程の間に出版された讚美歌集で、此の歌の入つてゐないのは、英米兩國にて殆んど一冊もない、と言つていゝ程である。そののみか今では、此の歌は歐羅巴はいふに及ばず、諸外國の言葉に廣く譯されて來た。その理由は至つて明白である。此の歌ほど飾氣なく、明かな使命を人類の心に與へた者はなく、又これより一層切なる内心の訴へを、明かに言ひ現はした者も、他にその例がない。此の歌は、實に基督教的眞理の敘述

として、又救の福音の梗概として、實際的の價値がある。即ち個人々々の經驗の記述の一節なのである。

作者 Miss Charlotte Elliott は、アングリカン教會の信者で、同教會の牧師で、また讚美歌の作者としても功のあつた兄弟の許に、五十年近く棲んでゐた。牧師の妻も又その娘の Miss Emily Elizabeth Steele Elliott も讚美歌を作つたが、娘の作には、『さんびか』第二編七十五『さらさらわたれるよはに』(There came a little child to earth) を、同第七十六『みかむりも 御殿をも すてさせたまひて』(Thou didst leave Thy throne and Thy kingly crown) 等がある。

併し此の人々の中で、主な人物は、その姉妹であり、叔母であるシャロットであつた。その不朽の作『いさをなきわれを 血をもてあがなひ』が、殊に彼女をさう呼ばせたのである。彼女は永い間、病氣でひどく苦しんだ。此の歌を書いた一八三四年は、それが殊にはげしかつたといふ。兄弟の牧師は Brighton

教會の關係から、女學校を設立しようとしてゐたが、その設備に要する資金を得る爲めに、慈善市を開いたので、教区内の人々はそれを成功させるのに、目も廻る程忙しく立ち働いてゐた。病氣のシャロット許りは、之を助ける事もかなはず、人の忙しい時を、じつとたよりなく、胸にせまるやうな思ひをして送つた。此の經驗は、だん／＼と進んで、精神上の戦ひを引き起し、遂には、靈の生命その者さへも疑ふやうになつて來た。永き病に起る斯かる反動は、何處にもあることで、『靈の生命といふのは、只感情の幻影で、たしかな物といつては、肉の喜び、さては肉の疲れ苦しみを絶えず伴ふ、肉體の生命のみではあるまいか』この疑問の起るのも、無理ならぬことである。

他の者が慈善市で忙しい時に、只一人病室に残されたシャロットは、遂に或る自覺に達した。それは自分の様な心持の者が平安を得るには、神の恵と偉大なる靈界の事實とに心の眼を注ぐにあるといふ考である。そこで暫らく黙想

した末、ペンと紙とを取り上げ、書き綴つたのが、即ち赦しと平和とについての福音、及び人間がその全身を神に捧げるなら、神はそれに對して聖き愛を必ず示し給ふといふ、彼が確信の表白であつた。シャロットの詩的な頭には、此の思想が自然詩の形を取つて現はれた。程經て、或る人が慈善市の模様を知らせに來た時に、歌はもうすつかり出來上つてゐて、訂正の必要もない程であつた。歌は間もなく出版され、そして其の後何年となく、多くの人々に感化を與へ、精神上の力を與へた。その印刷したのが一部、シャロットの醫師の手に入つた。信心深い醫師は、それを更に彼女に示さうと持つて來た。ところが思ひ掛けなくも、その歌の作り主は、彼女自身であつた。後に之に就いて、牧師なる彼女の兄弟は、斯んな事を言つた。『シャロットの歌は自分の永い目覺しい牧師生活が結んだ收穫より以上の精神的効果を收めた』。最も弱い者の内に、屢々最も強い力がある基督教の奉仕を、最も効果あらしめんために、身體

の虚弱をも、神は必要の條件となし給ふ事がある。此の二者の對照は、一見奇なるに似てゐるが、此によりて、大いなる教訓を學び得よう。此の歌は、無類とは言はれない迄も、何の方面から見ても、英語の歌の内で第一流に位すべきものである。作者は病める者、悲しめる者の爲めに歌つて聞かせたが、これは他の作者の餘りしない事である。而して歌の抒情的本質が、又大いに其の歌の精神的内容を強めてゐる。

エリオットの文學上の努力は、めざましく、その作つた讚美歌の數は、百五十ばかりある。何れも文學上不變の質を備へ、音律も大概一樣である。これ等は様々の歌集に出てゐるが、殊に『病める者の歌』(The Invalid's Hymn Book) 及びその兄弟 Henry Venn Elliott の名の下に出版された『詩篇と讚美歌』(Psalms and Hymns) の中に入つてゐる。

又此の他に『花のあけぼの 月の夕ぐれも』(My God, is any hour so sweet)

（さんびの第一編二三九・選歌集同上）といふのも、非常に教會から歓迎された。尙『うつりゆく世にも み手にすがり』（O holy Savior, Friend unseen）（さんびの第一編二九五・選歌集二三二・古今二九八）などもある。この二つより勝れてゐるのは、"My God and Father, while I stray"（選歌集二一〇）であるが、これは不幸にして『さんびか』にも『古今』にも、選ばれてない。『いさをなきわれを』が、悔悟してゐる罪人の爲めの歌である様に、之は又精神的に發達を遂げた、聖徒の爲めの咏である。而して『いさをなきわれを』が、義とせらるゝといふ大切な意義を含むごとく、之は聖とせらるゝ事に重きを置いたのである。

シャイロット・エリオットは、一八七一年、その生地ブライトンで死んだ。

女史は、一七八九年の生れで、行年八十二歳であつた。

Sir George Job Elvey 卿の St. Crispin は、『ちをなきわれを』に合せた英國の樂譜であつて、米國では、却つて Bradbury の Woodworth の方が、一般に好

まれる。

エルヴェー（一八一六—一八九三）は、一時 Windsor の王室會堂（Royal Chapel）附のオルガニストであつた。彼は Canterbury に生れ、其處で教育をうけ、後オックスフォード大學に學んだ。此の人の讚美歌の譜は、非常に多い。この他にも、人に喜ばるゝアンセムを作り、一八七一年には、皇女ルイス（Princess Louise）の結婚式に、祝ひの進行曲を作つた。彼は同年ヴィクトリア女王（Queen Victoria）によつて、ナイトに叙せられた。

William Batchelder Bradbury（一八一六—一八六八）は、メーン州（Maine）に生れた。父は New England の農夫であつた。始めは靴屋であつたが、間もなくボストンに至り、音樂者ロウエル・メースン博士（第參篇參照）の門下となり、後歐羅巴に渡り、Leipzig 音樂館（Conservatory）に入つて研究した。米國へ歸つてからは、ピアノ製造に従事するかたはら、音樂の教師、唱歌隊の指揮者、作曲家

編纂者、又日曜學校及び祈禱會に用ゐる歌の出版者などをつとめた。彼は一個人として、又 Sankey や Doane などと協力して、米國の教會で用ゐる音樂を輕快ならしめるやうにしたので、『アメリカ日曜學校近代音樂の父』とまで稱せられた。『さんびか』第一、第二兩編を通じて、ブラッドベリーの曲は、二十三あるが、其中で重なるものは、第百“‘The Sweetest Name’” 第二百十四“‘The Solid Rock’” 第二百二十三“‘He leadeth me’” 第二百二十八“‘Sweet Hour’” 第四百十四“‘Atonement’” 第四百十八“‘Jesus loves me’” などであらう。Edin Street (さんびか第一編三三九) の作曲者シモン・ベック・カス・ダイクスの事は、本書第四篇を参照せられたい。『うしろゆぐせにも』“‘O Holy Savior’” の Flemming 調は、もとは獨逸の Friedrich Ferdinand Flemming, M. D. (一八八二—一八三三) が、Horace の短歌 Integer Vitae に合わせて、男聲四部合唱に作つた者である。この歌は今でも、歐米の大學生間によく歌はれる。

前に述べたエミリー・エリザベス・ステイル・エリオットは、ブライトンで一八三五年に生れ、一八九七年に死んだ。女史の歌は、小兒の爲めに書かれた者で、可なり廣く讀まれ、多くの人々を益した。始めは女史自身の編輯してをつた兒童宗教雜誌に出たが、間もなく英米の唱歌集に、遍く載せられる様になつた。

『さんびか』第二編七十五、及び二百〇七(さんびか第二編の緒言を見よ)『子供の歌』の作曲者 Herbert Francis Raine Walton (一八六九—) は、グラスゴー寺院 (Glasgow Cathedral) のオルガニストで、又唱歌隊の指揮者である。又第二編七十六、二百三十九、及び第一編三百〇六の作曲者 Timothy Richard Matthews (一八二六—) は、英國々教會の退隱教師である。

第十七、十八

『かみは風に乗る なみをあゆむ』“God moves in a mysterious way”

(さんび第一編二一九・古今二四三・選歌集一九六)

『さかえにみちたる かみのみやこは』“Glorious things of Thee are spoken”

(さんび第一編一三〇・古今一六二・選歌集一三三)

所謂『オルチー讚美歌』(Olney Hymns)の作者 John Newton と William Cowper との関係は、百年餘り前の話ながら、讚美歌史上最も興味あることの一つである。ニュートンは、一七二五年に生れ、一八〇七年に歿し、クウバーは一七三一年に生れ、一八〇〇年に世を去つた。この歌集中の數篇は、近代の讚美歌集にも轉載され、爐邊の歌として、基督教國の至る處でもて囃されてゐる。これでもこの歌集の價値が知れる。クウバーの作では、

『神は風に乗る なみをあゆむ』(God moves in a mysterious way)

『御神のひかりよ やみをわけて』(O for a closer walk with God)

『いづこにみたまの よりつごもをりよ』(Jesus, where'er Thy people meet)

又ニュートンのは、

『さかえにみちたる かみのみやこは』(Glorious things of Thee are spoken)

『エスキみの御名は たへなるかな』(How sweet the Name of Jesus sounds)

『友といふ友は なきにあらねど』(One there is, above all others)

など、いづれも編中のものである。

こゝにそれ〴〵三首づゝ挙げたが、何れもその最初の歌を、代表作と見て論ずるに、差聞なからう。さはいへ兩作者の経歴には、互に極く密接な關係があるので、到底別々に論ずることは出来かねる。

ニュートンの父は、ロンドンの人で、船乗を渡世とし、クウバーの父は、英國

の田舎牧師であつた。それ故ニウトンは、少年の時に船乗となり、クウバーは法律を修め、又幾年か實地その職に當つて見たが、思はしくなく、却つて道の違つた文學の研究とか、文士の交際とかに興味を有つてをつた。クウバーには、早くから陰氣な所があつたが、それがおひく進んで、彼が晩年を全く惱ました。彼は時々、自殺を企てたことさへあつた。併し、神のめぐみにより、不斷氣を配つてゐて呉れた友達のおかげで、この運命を免れた。

こんな障害もあり、且つ文學の上からの選り嫌ひもあつたので、彼は遂に法律を棄て、ケンブリッジに近い處に退き、其處で間もなく Down と呼ぶ夫婦の者と、暖かき友情を結ぶ様になつた。彼が、當時この附近のアングリカン教會の牧師をしてゐたニウトンと、近附になつたのも、此の家であつた。斯て友情まじ加はり、兩人協力して『オルチー讚美歌』を編んだ。キリスト教會は、この歌集の大なる恩澤に浴してをるのである。

ニウトンの少年時代は、クウバーとは大分違つてゐた。前にも述べた通り、彼は十二の年から船乗となり、船乗生活の悪習に感染して、墮落の淵に沈み、様々の憂き艱難を嘗めた。その経験は、やがて彼が基督教界に活躍する土臺となつたのである。

彼もクウバーの如く、『その歌に籠つてをる教訓は、惱みの中に見出した』(“He learnt in suffering what he taught in song.”)者であつた。彼の臺石に彫り付けてある自作の碑文は、その放蕩に過した何年かの經歷を語つてをる。碑文はかうである。『牧師ジョン・ニウトンは、曾て放縱背信の徒、アフリカ奴隸の僕なりしが、吾等の主、救主イエス・キリストの裕かなる恵に生まれ、償はれ、赦され、且つ選ばれて、彼が多年破壊に努めし信仰を宣傳しつゝ、バックスのオルチーに十有六年、當教會に二十七年を過せり。』後に牧師になつた處といふのは、ロンドンの Saint Mary Woolnoth 教會で、ニウトンは、其處で、この世

の務を終へた。彼はタルソのソウロと同じ徑路を辿つた人で、その傳道の收穫も彼と同じく、並の傳道者の比ではなかつた。

話はニウトンが放浪生活時代に戻る。彼は始めは、商船に乗り込んでをつたが、時の習慣で、後、軍艦の乗組員になつた。そこで少尉候補生になつたが、それが思はしくないので、遂に免職となり、それから奴隸船の船長、尙その先は、前にも述べた様な賤しい務をするまでに、なり下つた。彼は曾て何心なく Thomas & Kempis の作を讀んでゐた時、不圖、より善き物の閃きが目に觸れた。それも一時、再び思ひ出したのは、逆も逃れぬ運命に攻め詰められ、死を眼前に見つめた時であつた。それはちやうど彼が二十四歳の時の事、或る日、乗り込んでゐた船が大嵐に遭ひ、今にも沈没せん許り、望もほご絶えなんとした。人々と一所になつて、ポンプで一心に水を酌み出してゐた時、ふと胸に浮んだのが『自分は罪深い者である』といふ考であつた。こゝに於て彼は心

機一轉し、全然生れ代つた人となつた。幸ひ、船は沈没せず、ニウトン初め船中の人々は皆助かつた。ニウトンは英國に歸る早々、基督教の傳道師とならうと、勉強し始めた。初め神學の研究者として、ホイットフィールドや、ウエスレー兄弟と交際したが、後、英國々教會の教職となり、一七六四年には、オルチーの牧師に任命された。

これまでの生涯は、詩才の發達に適して居らなかつたのであるが、幾許もなくニウトンは、この道に少からず天才のあることを示した。彼はクウバーと交り結び、程なく二人協力して讚美歌集を編纂し、それによつて名を成した。この計畫は、ニウトンがその友の性質に適つた仕事を見出し、獨りでをると危険であるその心を常に引き付けて置く様な、何か定まつたつとめに就かせたい、と思ふ親切から出た者だとの事である。

アンウイン家に不幸のあつてからは、兩人は一つ屋根の下に住むことゝな